

ハリー・ポッターと運命を貫く槍

ナツシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——その日、運命の歯車はどうしようもなく狂ってしまった。

※オリキャラ多め。苦手な方はブラウザバック推奨。

目次

賢者の石

第1話	ダイヤゴン横丁	1
第2話	ホグワーツ特急	12
第3話	組み分け帽子	25
第4話	閑話 友情	38
第5話	魔法薬学	49
第6話	飛行訓練	60
第7話	ハロウイーン	72
第8話	決闘	85
第9話	敗北	97
第10話	恐怖	110

賢者の石

第1話 ダイアゴン横丁

ロンドン郊外にある小さな森。

そこは特定の誰かが所有する土地というわけではなく、公的に所有されている自然保護区だ。それほど広いというわけでもないが、長年人の手のついてない雄大な森林が広がっている。

当然、その森に住み着いている不届き者などいるはずもない。

——というのが、その近隣の住民たちにとっての常識であった。

しかし、常に霧が立ち込める森に入つてすぐのところには、これでもかという程に巨大な豪邸がふてぶてしくも堂々と鎮座していた。

いつそ不気味なまでの静寂に支配された森に聳える、見あげようとすれば首が痛くなるほどに大きく、荘厳な雰囲気を纏った屋敷。成人男性の何倍ほどもあろうかという程に大きな木製の扉は、手入れが行き届いているようで埃一つ付いていない。

その大きさと美麗さたるや、恐らく数多くの大富豪を自称する者達が恥じ入ってしまうほどである。

だが不思議なことに、近くの村に住む者でもこの館のことを知る人間は誰一人としていなかった。また、たまに森に遊びに迷い込んでくる子ども達も、この建物を目にすることは一度としてなかった。

人も動物も寄り付かぬ、まるで絵画の中のような、神聖さすら感じさせる景色である。

しかし、それは突如やってきた訪問者によって打ち破られる。

野生の動物すら避けるように暮らすこの不気味な館へ空からやってきた闖入者は、立派な毛並みをした梟だった。

まるで迷う様子もなく一直線にバルコニーに舞い降りる。

その梟の両脚には美しい装丁のなされた一枚の封筒が握られていた。

「ああ、ありがとう」

まるでその鼻が来るのを予期していたかのように、その少年はバルコニーの手すりに腰掛けていた。

吸い込むように美しい黒髪に、驚くほど端正な顔立ちをした少年だ。腕には銀色のブレスレットをつけている。

寝起きなのかぴよこぴよこと寝癖のついている頭をかきながら手紙を受け取り、代わりに魚の切り身を乗せた皿を鼻の前に置いてやった。

美味そうに赤身を突つつくシマフクロウから視線を切り、鮮やかな赤の紋章を施された封蝋を開け、中身を確認する。

予想通り、それは『ホグワーツ 魔法魔術学校』からの入学案内であった。

——この世界には、魔法界なる、普通とは異なる世界が存在する。

魔法。そして、その魔法を扱う人間である魔法使い。さらには巨人、吸血鬼、人狼などの亜人からドラゴンやユニコーンなど??例を挙げればキリがないほど、魔法に関する生物は多種多様に存在する。

一般人——すなわち、非魔法族には気づかない領域で、たしかに魔法や魔術はこの世界に遍在しているのだ。

そして、その魔法に関して学ぶ魔法学校もまた存在する。

ホグワーツ魔法魔術学校は、その中でも間違いなく最高峰の環境の整った魔法学校だ。

この学校に入学する資格を持つ者は、魔法の才能を持っていることと、入学式までに11歳に達していること。

入学案内の手紙を受け取るのは、11歳の誕生日。彼にとってはつまり、今日、8月1日。魔法界でも良家の跡取りとして生まれたこの少年の誕生日である。

「ミッツ」

「はい、ハイハイ」

少年が何者かの名を虚空に呟くと、バチンという音とともにキイキイと甲高い声で話す小さなエルフが彼の隣に現れた。

『姿現し』という、一瞬で空間を飛び越える、いわゆるワープのような魔法だ。

妖精流のその呪文を行ったのはこの屋敷に住む『屋敷しもべ妖精』の中でも一番信のおける一人であり、幼い頃から身の回りの世話をしているミッツだ。

「ホグワーツから手紙が届いた。入学案内だ」

「なんと!!? おめでとうございます、お坊ちやま! ついにお坊ちやまもホグワーツに入学されるのですね! 本日のディナーはこれまでで間違いなく最上のものを用意いたしましょう!」

思わず、少年は苦笑を浮かべる。

彼がホグワーツに入学するのは生まれる前から決まっていたことだし、今日ホグワーツから手紙が来ることだって分かりきっていたことだ。勿論そんなことは朝一番で誕生日の祝いの言葉を告げに来たミッツも知っている筈だ。

だが、今にも甲高い声で咽び泣きそうな(というか、既にその大きな瞳の端から雫がこぼれ落ちている)様子のミッツを見ると、そんな野暮なことを言う気にはならなかった。

「それで、一年で必要な教科書とかのリストも入ってたんだ。天気も良いし、今日ダイアゴン横丁まで行こうと思う」

すつ、と右手をミッツに差し出す。

入学にあたって必要なものを買い揃える為には、ダイアゴン横丁という魔法族御用達の店が立ち並ぶ通りに行く必要がある。

そこへ行くのに最も手っ取り早い手段が、先ほどミッツのやった姿現しだ。実を言うと少年も姿現しを扱うことは可能なのだが、免許を保持していない為に人目のあるところへ跳ぶのは躊躇われた。

そこでミッツの出番だ。屋敷しもべ妖精の使う魔法は魔法族の使う魔法とは異なり、法律にも制限されないのだ。

しかし、差し出した手はいつまでも握られない。

訝しげに視線を下に向けると、彼はまるで信じられないものを見るようにこちらを見つめ返していた。

「??ミッツ? 姿現しを——」

「お坊ちやまー！ 坊ちやまは聖28一族に名を連ねる格式高きフオウリー家のご当主！ そのようなだらしない格好で人前に出ては、お坊ちやまだけでなくフオウリー家の品格が疑われてしまわれます!!」

しまった。

ヨレヨレのパジャマを親の仇のように睨みつけるミッツに慌てて弁明しようとしたが、時すでに遅く、ミッツは森中に響く程の大きな声で喚き始めた。

屋敷しもべ妖精の中では割と物静かなタイプの子であるが、このフオウリー家に対する誇りは寧ろ当主である少年以上のものを持っている。家の看板に泥をつけるような言動を行う者には、例えそれが主人であつても非常に口煩い説教が待っているのだ。

つんざくような高い声で怒鳴り散らしてくるミッツに辟易としながら、少年——フオウリー家が跡取り、アレステット・フオウリーは天を仰いだ。

「お坊ちやまがこのような有様だと知ったらお母上様がどれだけ悲しまれることか?!?!? ——聞いていますのですか?!?!?」

空には、城へと帰る梟の後ろ姿がぐんぐんと小さくなっていった。

朝から無駄に体力を消費してしまった。姿くらまして屋敷に戻っていったミッツを思い出しながら嘆息する。

長年——それこそ生まれる前から——仕えてくれているミッツの性格を知っているのにあんなことを言ってしまうなんて、どうやら知らず知らずのうちに浮かれていたらしい。

久々にやってきたダイアゴン横丁は、相変わらず多くの魔法族で賑わっていた。しかも、普段よりも明らかに人が多い。マトモに歩くことも難しい。入学シーズンだからだろうか。

(流石に、暑いな?!?)

真夏の気温にこの混雑は辛い。こっそりと自分の周りの周りの気温を下げる魔法を使い、体温を調節する。これだけの魔法使いがいれば『臭い』でバレることもないだろう。

人混みを掻き分けつつ、フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店で教科書を揃えたり、鍋屋で鍋を購入したりして着々とリストにチェックを入れていく。その合間に怪しげな店で面白そうなモノと漁っていく。

購入したモノはポイポイと検知不可能拡大呪文をかけた小型の肩掛け鞆に入れていった。

残るは杖と制服だけだ。

制服を売っているマダムマルキンの洋装店を覗くと、黒髪の少女が採寸してもらっているところであった。

流石にそこに入っていくほどデリカシーが無い訳ではないので、本当は最後の楽しみにとっておくつもりだった杖を先に見に行くことにした。言うまでもなく、魔法使いにとって最も重要な魔道具である。

オリバンダーの店。

魔法族が国内外からわざわざこの杖を買うためだけにこのダイアゴン横丁へ来るほど高名な杖メーカーの老舗である。

いや、この店の看板にかかれた紀元前4世紀に創業というのが本当なら、老舗などというレベルでは済まされないだろう。もし直系の子孫で営んでいるのなら、聖28一族でも最も由緒正しき家系ということになる。

杖を買うならココ、とアレステットの母もよくいていた。できれば杖を手にした姿を見せてやりたかったが???

不意に脳裏にフラッシュバックした痩せこけた母の姿を振り払う

ようにかぶりを振り、店に入る。

タイミングが悪く、中では丁度一人の男の子が店主であろう老人に杖を選んでもらっているところであった。

店内にある椅子は毛むくじやらの大男に占領されており、アレステットは仕方なく立ちながら終わるのを待つことにした。

マグルの格好に眼鏡を掛けた男の子が杖を振るい、老人がすぐさま取り上げて別の杖を握らせる。またすぐに杖を取り上げ、ブツブツと何事かを呟きながらまた別の杖を用意する。

「——難しい客じゃの。え？ 心配なさるな。必ずピッタリ会うのをお探ししますでな」

かなり時間がかかっている上に後がつかえているというのに、オリバンダー老人は嬉しそうだ。

長丁場になりそうだ。壁に背を預け、目をつぶる。

しかし、その瞳はすぐさま開かれることとなった。

「オーツ」

「ブラボー！」

赤と金の火花が音を立てながら舞い散り、光の玉が薄暗い店内を明るく染める。とんでもない派手さは無いが、なんだか心が温かくなるような優しい光だ。

大男が赤ら顔で柏手を叩き、オリバンダーも嬉しそうに頷いている。

眼鏡をかけた少年がオリバンダーと幾つか言葉を交わしてから店を出ようしたとき、ようやく彼らはアレステットに気づいたようだった。

「あつ、ごめん、待たせちゃったかな?」

ボサボサの黒髪に傷のついた丸眼鏡をかけた少年が申し訳無さそうにこちらを見つめる。

「いや、今来たところだから気にしなくていい」

なんだかデートのお約束の会話のようで、思わず苦笑いを浮かべ

た。

店を出て行く眼鏡の少年と入れ替わるようにオリバンダーの前に立つ。

すれ違う際に彼は何か言いたげに口をモゴモゴとさせていたが、アレステットが気づくことは無かった。

「おお、こんにちは。今日は沢山のお客さんがいらっしやる。お名前を聞いても?。」

「——アレステット。アレステット・フオウリーです」

オリバンダー老人は大きく目を見開いた。

「なんと! では、あのアンタレス・フオウリーさんの子どもか! まさかご子息がおったとは??。ああ、あの子の杖も勿論覚えておりますとも。桜の杖で、柔らかくしなやかであった?。」

杖に関しての徳のある講釈を垂れながら、オリバンダー老人は魔法のかかった巻尺で突き出した右腕の採寸を測る。

??意味があるかは知らないが。腕の長さで杖の大きさを変えような二流では無いだろうに。

では、とオリバンダー老人が辺りに山のように積まれた細長い木箱から無造作に一つ杖を取り出してアレステットに手渡した。

「桜の木に一角獣の毛、26センチ」

杖を振ると、紫のスパークが舞い散った。杖からはビキビキと嫌な音が聞こえる。

「これはダメじゃな。では、次、リンゴの木にドラゴンの心臓の琴線、32センチ」

「ごう、と明るい赤色の光が店内を照らす、どうも手応えが無い。「悪くは無いが、もっと良い杖があるじゃろう」

オリバンダーが店中を駆け回り、王道から変わり種まで様々な杖を取り出す。

「リンボクにドラゴンの心臓の琴線、31センチ」

握ったか握らないかの内に別の杖が差し出される。素晴らしい早業である。

「ううむ、なんともまあ難しいお客さんだ。一日に二人もこうも難儀

な客が来ようとは?。いや、勿論素晴らしいことじゃ」

気づけば、合わなかった杖が山を形成していた。中には先ほどの眼鏡の少年のような現象を起こした杖もあったが、オリバンダー老人は満足しなかったようだ。

「ならば?。これは先代の作ったものじゃが?。イチイの木にセストラルの毛、24センチ」

握った瞬間、凄まじい暴風が吹き溢れた。魔力が赤色の光を伴って具現化し、アレステットの周りを渦巻く。

間違はなくこれまでで一番の手応えだ。

「なんと、素晴らしい?。しかし、この杖が選ばれてしまうとは——」

恐ろしい、と眩きながら何かを言い募ろうとしたオリバンダー老人。だが、それを遮るようにガタガタと店の奥で何かが暴れるような音が木霊した。

発信源は他の杖が入っている箱よりもよりも一段とボロボロの木箱が積まれているスペースだ。その木箱の山を崩すように、中腹に置かれた木箱がまるでバイブレーションのように振動していた。

「???」
「いや、そんな?まさか、あの杖が」

オリバンダーが目を見開き、その木箱を凝視する。覚束ない足取りで箱の前まで行き、ゆっくりとその古びた木箱を開ける。

抑圧から解放された杖は、蓋が取り除かれた瞬間に光の尾を引きながら流星のようにアレステットの前まで飛んできた。

すらりとした細長く、漆黒の杖だ。杖全体にとぐろを巻くように蛇が彫刻された不気味な造形の杖だ。

まるで使ってくれと言わんばかりに宙に浮く杖を微妙な表情で見やる。こんな、いかにも怪しい杖を握るのは少し躊躇われた。心なしか右手に握られたイチイの杖が不満そうにカタカタと揺れているように気もする。

店主に助けを求めるように視線をやるが、彼はこちらの様子を見守るようにじつと見つめている。

仕方ない。イチイの杖を傍におき、小さく深呼吸して杖を観察する。

持っているだけでスリザリンに組み分けされそうな如何にもな感じの杖だ。しかし、よくよく見ていると何か心惹かれるものがあるのも確かだった。

恐る恐る右手を伸ばすと、焦れたように杖の方からアレステットの掌に収まった。

——その瞬間、魔力が爆ぜた。

いっそ禍々しいまでに赤黒い光を帯びた魔力が衝撃波のように荒々しくあたりを吹き飛ばす。

まるで操られたように軽く杖を振れば、一筋の光も通さないような常闇の影が店内を覆い尽くした。

先ほどの杖を握った時よりも明らかに手に馴染む。素晴らしい高揚感がアレステットの胸に湧き上がった。

しばらくして興奮が冷めて冷静になると、やっとあたりの惨劇に気づいて頬を引き攣らせた。

あまりに強力な魔力の波動に床には少々ヒビが入り、そこいらの棚は崩れ落ちてめちやくちやになっている。

慌てて杖を振るうと、再生のように棚が元通りに整頓され、傷ついた床も先程以上にピカピカになった。

一連の様子を見守っていた静かにオリバンダーが杖について語り始めた。

「???ニワトコの木にバジリスクの角、36センチ。闇の魔術——特に、死の呪文に最適。7代前の当主が秘して作った逸品じゃ。まさかこの杖が選ばれる日が来ようとは???」

なんともまあ、曰くのある杖だ。素材もさることながら、よりによって『死の呪文』に適しているだなんてロクでもないも程がある。

しかし不思議なことに、そう言われてもアレステットはこの杖以外のものを選ぶ気にはなれなかった。

「何はともあれ、杖は貴方を選ばれた。どのような道を辿るにせよ、フオウリーさん、貴方は間違いなく偉大な魔法使いになるでしょう」
「??」

アレステットは僅かに眉を顰めた。まるで、暗に「貴方は闇の魔法使いになるだろう」とでも言いたげな物言いだ。だが、全てを見透かすようなオリバンダーの視線の前では感情だけで反論する気は起きなかった。

目を逸らし、代金を尋ねた。

「7ガリオンでございます」

「いいんですか?」

魔法省の補助金などのお陰によって、杖メーカーで売っている杖は基本的に7ガリオンで一律となっている。しかし、この杖の芯材であるバジリスクの角は間違いなく数百ガリオンを下らない筈だ。フオウリー家はかなりの資産家であるので、そのくらいは出すことはできるのだが。

「よいのです。使い手が現れるとは思っておらんかったですからな」

店主は頑なに7ガリオンしか受け取らなかった。なんとも職人気質な人だ。アレステットのには少々苦手な性格をしているが、そういう芯があるのは好ましいと思えた。

オリバンダーの札を背に受けながら店を出る。

洋装店に向けて足を踏み出した時、背中に強烈な視線を感じた。

「——ッ！」

ねっとりとした全身に絡みつくような気色の悪い感覚。憎しみや恨みと言った黒い感情では無く、しかし好意的なものには程遠いソレ。

勢いよく身体を反転させ、新品の杖に手をかける。

溢れかえる人混みの中に、こちらを見ている者はいない。

だが、視界の端にチラつく紫色の布が、いつまでも脳裏から離れな

か
っ
た。
。

込めばいいだけなのだが、マグル生まれの学生には何とも不親切な書き方だ。出発までに辿り着けない生徒がいたらどうするつもりなのだろうか。

「???ん?」

迷うことなく間の柵に向かうと、その前に立ち往生している小柄な少女がいた。バサバサと暴れるフクロウが入った小さな檻を右手に、左手にはパンパンに詰められた大きなトランクケースを引きずっている。

間違はなくアレステットと同じくホグワーツに向かう新生生だろう。

戸惑うように手元の紙を見ては視線を彷徨わせる様子から、案の定マグル育ちの新生生が戸惑っているようだ。

「??どうかしたのか?」

驚くように振り向いた黒髪の少女が、アレステットの手握られた入学案内を見て瞳を希望に輝かせた。

アレステットは思わず言葉を詰まらせた。

腰先まで伸びる美しく長い黒髪は癖一つ無く、陽光を反射して僅かに赤みがかっている。大きな瞳とは対照的にツンとした鼻や唇は小さく、その顔立ちはとても整っている。

同年代と比べて随分と身長は小さいが、すらりと細長い脚が彼女を見た目以上に高身長に見せていた。

あまり人と関わることのないアレステットにも分かる程可愛らしい女の子で、文句のつけようもないくらい美少女だった。

「あ、はい。もしかして、貴方も、その??」

「???ああ。ホグワーツの新生生だ。行き方が分からないんだろ?」

「はい??。4分の3番線というのは勿論存在しませんし、駅員に訊いても変な顔をされましたし?」

重いため息を吐く少女は何とも沈痛そうだ。入学への緊張も相まって精神的に参ってしまったのだろうか。

「まあ、あの手紙だけじゃ分からないよな??」

見ていてくれ、と言い残してアレステットは4分の3番線の入り口

である柵へと突っ込んだ。

「ちよ、ちよつと——ッ!?!?」

戸惑い、次いで驚愕を背に、ずんずんと進んでいく。勿論、衝撃は無い。視界が一瞬の暗転とともに切り替わる。おそらく、『移動キー』の応用だろう。

「わつ?!?!?」

背後からこけるように飛び出してきた少女を抱き止める。折れてしまうのでは無いか、というほど華奢な身体つきだった。

「大丈夫か?」

「?!?!?」

少女の視線の先にはマグル製の蒸気機関車がプラットホームに停車しており、多くのホグワーツ生で賑わっていた。

「これが魔法?!?」

アレステットにしてみればそこまで物珍しいようなことではない。だが、初めて見るだろう魔法の現象に目を輝かせながら破顔する美少女を見ていると、こちらまで気分が良くなる気がした。

少女はしばらく物珍しそうに辺りを見回していたが、チラチラと微笑ましそうにこちらを見るような視線に困惑の表情を浮かべる。

そして、やつと自分がアレステットの腕で優しく抱きしめられるような格好になっていることに気付いた。

「?!?!?」

ぼふんつ、と羞恥に顔を赤らめ、慌ててアレステットの腕から逃げ出す。両手で自分の身体を掻き抱くようにしてアレステットを睨みつけた。

そんなつもりは無かったのだが。

苦笑いを零しながら肩を竦め、アレステットは列車の中へと入っていった。

少女も慌てたようにアレステットの背を追いかけた。

その様子を見ていた辺りの大人が向けてくる生暖かい視線には気づかないフリをした。

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私はシルフィ・コールフートと言います」

「アレステット・フォウリーだ」

空いていた奥のコンパートメントに入り、自己紹介を交わす。丁度汽車が動き始めた頃だった。

対面に座る少女はやはりマグル育ちのようで、それからしばらくの間アレステットに魔法界に関する質問を投げかけてきた。

ホグワーツに関する事、寮に関する事、魔法に関する事、魔法生物に関する事。その度にアレステットは知りうる範囲内で答えた。

だが、困った質問もあった。

「クイディッチとはどういう競技なのですか？」

「??箒を使う競技だ。魔法界では一番ポピュラーなスポーツなんだが??」

「? どうしました?」

「いや、実は俺はクイディッチにはあまり詳しくないんだ。どうもあの競技は好きになれなくてね」

皮肉げに笑って肩を竦める。

このくらいの歳の男の子であれば大抵クイディッチに夢中なものだ。どこそこのチームのファンだの新作の箒が発売したただのとはしゃいでる年頃だろう。

しかし、アレステットは箒自体にそれほど興味が無かった為か、クイディッチのルールすら覚えられないのが現状だった。そのルール自体割と無茶苦茶だったのも好きになれない大きな要因の一つである。「まあ、箒を使った授業は一年からあるからな。クイディッチについて自慢気に話してるやつは沢山いるだろうから、その時にでも訊くといい」

「??わかりました。それにしても、本当に箒で空を飛べるんですね?」

箒に乗って空を駆ける。アレステットにとっては常識でも、シルフィにとつてはまるで御伽噺の世界だ。

質問に答える度に新鮮な反応を返してくれるシルフィはアレステットにとつても新鮮で、随分と教えがいがあった。

「凍れる時間の秘法とか極大消滅呪文とか使えるんですか？」
「そんなものは存在しない」

アレステットが車内販売で買い込んだお菓子を二人して分け合いながら魔法界に関する一問一答を続けていると、突如コンパクトメンが勢いよく開かれた。

入ってきたのはボサボサの栗色の髪にリスのような前歯が特徴的な少女と、小太りでベそをかいている少年だ。

「誰か、ネビルのヒキガエルを見なかった？」

「ヒキガエルですか？ いえ、見てませんけど??」

「俺も見っていないな」

そう答えると、小太りの少年——恐らくネビル——はますますしゃくりをあげてぐずり始めてしまった。

「そう??。なら一緒に探してくれない？ もう小一時間探してるのに全然見つからないのよ」

率直に言うのと、かなり面倒くさそうだ。チラリとシルフィを見ると彼女も同感なのか、露骨に嫌そうな顔をしていた。というよりこの少女の高圧的な物言いに苛立っている様子だ。

「そういう魔法はないのですか？ 無くしものを探したりするような」

「私、教科書は全部暗記してるけど、そんな呪文は載ってなかったわ」

二人は思わず顔を見合わせあった。

教科書を暗記した？ あの分厚い本の束を？ それも全部？

もしかしてそれが常識なのだろうか。新入生は皆それを熟して入学するのか。

シルフィがそう目で問いかけてきたが、勿論アレステットは首を振った。間違いなくこの少女が特殊ケースなだけだろう。アレス

テットに関しては教科書のタイトルすらうろ覚えである。

「フオウリー、どうしますか?」

「あー??」

正直、断りたいというのが本音だ。しかし、そうればこの栗色の髪の少女が烈火の如く怒り出すのは目に見えている。

僅かな思案の後、アレステットはネビルと目を合わせた。

「??ネビル、だっけか」

「う、うん。ネビル・ロングボトム」

「じゃあ、ロングボトム。そのヒキガエルの名前は?」

「えっと、トレバーっていうんだけど?」

アレステットは小さく頷き、無言で右手をかざす。

出っ歯の少女が怪訝そうにこちらを見つめた。

「何してるの? そろそろホグワーツに着くから、早くしないと――」

少女の言葉を遮るように、勢いよく室内に小さな物体が飛び込んできた。その茶色がかった緑の物体は減速しながらアレステットの手に収まった。

アレステットはぬるぬるした感覚に顔を顰めつつネビルにそれを手渡す。

「トレバー!」

大喜びでそれを受け取るネビルを見て、突然のことに固まっていたハーマイオニーがアレステットに食ってかかってきた。

「今の、どうやったの!? 魔法よね? そんなの『基本呪文集』には載ってなかったわ! それに、杖も呪文も無しにどうやって?」

「一年じゃ習わないんじゃないか?」

ぞんざいに返した答えに、少女は口をパクパクさせながら顔を真っ赤にした。気のない返事に、バカにされたように感じたようだ。

「もういいか? 俺らもそろそろ着替えなきゃいけないし」

少女は妬ましげにアレステットを一睨みすると、大きく鼻を鳴らしてコンパートメントから出て行ってしまった。

アレステットとしては別に悪意があった訳ではなく、唯の提案だっ

たのだが、彼女はそうとは受け取らなかつたらしい。

小さくため息をつくアレステットに、シルフィが同情のこもった視線を向けた。

大切そうにトレバーを懐に潜り込ませたネビルがアレステットに向き直って大袈裟に頭を下げた。

「本当にありがとう!!? えーつと??」

「アレステット・フォウリーだ。別にこのくらい気にしなくてもいい」
「私はシルフィ・コールフートです。ロングボトムも着替えなくていいんですか?」

ネビルは自分が未だにマグル(のような)服装をしていることに気づき、アレステットに何度も礼をしてから慌てて自分のコンパートメントに戻っていった。

「コールフートから着替えていいぞ」

「分かりました。??覗かないで下さいよ?」

シルフィがジト目でこちらを睨む。どうやらまだ先程の事を根に持っているらしい。

「勿論だ」

扉から出て、入り口の脇にもたれかかる。

こんなに誰かとの会話を楽しんだのはいつぶりだろう。たった数時間だが、アレステットにとってはとても刺激的な時間だった。思い返してみれば、同世代の年の子とこうして世間話をするのも初めてのことだ。

Hogwーツに入学する目的は、図書館にある希少な書籍と卒業生という箔を貰うことだけだった。だが、こういう友人関係というの悪くない。

アレステットは間もなく Hogwーツに着く旨を伝える放送を聞きながら、静かに胸を高鳴らせた。

「イチチ年生! イチチ年生はこつちだ! ハリー、元気か?」

見上げるほどの大男の元に、汽車から降りた新入生が集まる。2年

生以上の生徒は別経由で行くらしくここにはいない。

「凄く??大きいですね?」

「ああ。もしかしたら先祖に巨人族か何かがいるのかも知れないな。??ん?」

その髭面の大男にはどこかで見覚えがあった。

視線の先にいる眼鏡の少年を見て、合点がいったように頷く。オリバンダーの店で出会った二人組だ。

いや待て。

あの男は今、『ハリー』と言ったか。

——あの、ハリー・ポッターか。思わず眼鏡の少年を凝視した。

アレステットと同じことを思ったのか、周りの生徒もヒソヒソと小さな声で話しながら件の少年に視線をやる。少年——ハリーは恥ずかしそうに縮こまった。

「?? どうしたのですか?」

「??ああ、そっか」

周囲の反応に不思議そうに首を傾げるシルフィに、小さな声で事情を説明してやった。

——かつてヴォルデモート卿と呼ばれる男がいた。史上最悪と悪名高い闇の魔法使いだ。

彼は他の追隨を許さない圧倒的な力と、狂信的な純血主義の下に『魔法界の浄化』を掲げマグル、マグル生まれの魔法使い、混血、敵対する者達を無慈悲に殺戮した。

その危険極まりない思想に同調する者や恐怖に屈した者や服従の呪文にかけられた魔法使い達が『死喰い人』として彼の下に集まり、闇の陣営として一大勢力を築きあげた。

その勢いたるや凄まじく、イギリス魔法界は陥落寸前にまで陥ったという。人々は畏怖を籠めてヴォルデモートを『名前を呼んではいけない例のあの人』だとか『闇の帝王』と呼び、その呼称は今もなお使われている。

そんな彼を打ち倒したのは、信じがたいことにまだ一歳になったば

かりの赤ん坊だった。如何なる奇跡を起こしたのかは定かではないが、少年は魔法界の英雄として歴史に名を刻んだ。それが10年ほど前の話だ。

「??その英雄が彼、ですか?」

「ああ、そういうことになる。ハリー・ポッターの名を知らない者は多分魔法界にはいないだろう」

シルフィは疑わしそうにハリーを見つめる。何せ、どこからどう見ても普通の、どこにでもいそうな少年だ。そんな大仰な人物には到底見えない。

「それ、本当なんですか? 赤ちゃんがそんなことできるなんて??」

「さあな。もしかしたら、生まれた時から呪いに対する強力なカウンターを持っているのかもしれないな。死の呪文を跳ね返す程の」

そう考えれば辻褄が合う。実際、彼の額についた稲妻の傷痕はその時についたものとされている。

——もつとも、この仮説は的外れだろう。母親曰く、かの帝王は死の呪文をその身に受けながらも哄笑をあげていたという。そんな化け物がただ単に死の呪文を跳ね返されただけで敗北するとはとても考えられない。

遠目でも見えるハグリッドの背を列をなして追いかける。険しく狭い上に真つ暗で足元が覚束ない小道を歩いている内に、みんなだんだん喋る余裕が無くなってきて静かになっていく。2人もそれに倣って黙々と歩いた。

「うおーっっ!!?」

あちこちから大きな歓声が湧き上がった。一気に開けた視界の先で、美しい夜空に浮かぶように壮大な城が聳え立っていた。眼下に広がる巨大な泉も相まって、まるで絵本の表紙のような光景だ。シルフィとアレステットも思わず息をするのも忘れて見入ってしまう。

「4人ずつボートに乗って!」

大男のしゃがれた声にやっと正気を取り戻した新入生達が順繰り

にボートに乗り込んでいく。船頭はおらず、魔法をかけられているようで、全員が乗り込んで大男が掛け声をかけたのと同時にゆつくりと湖面を滑り出した。

アレステットとシルフィは、丁度前にいた2人と一緒に乗ることになった。2人とも女の子だったので、アレステットは肩身の狭い思いがした。

1人は金髪のおさげと間延びした口調が特徴的な女の子で、見るからに優しそうな子であった。

問題は、もう1人の少女であった。

容姿だけであれば、思わず息を呑むような非常に可憐な少女だ。

暗闇にあっても輝くように美しくシミひとつない金髪をツインテールに結っている。その髪型にも関わらず、この年頃の女子にしては非常に高い身長が彼女を決して幼くは見せない。

彫りの深く、目鼻がハッキリとした顔立ちは可愛いというよりはその歳にして美人と形容した方が正しいだろう。シルフィとはまた違ったベクトルで整った顔の造りで、一言で言えば豪華な印象を受ける顔立ちである。吊り上がった勝気な瞳がキツそうなイメージを受けるが、一部の男子生徒には非常に受けが良さそうだ。

同い年とは思えないほど発育がよく、既に若干ではあるが要所要所で丸みがあるような気さえした。だというのに、手足はすらりと細長く、無駄な肉はついていないようだ。

周りの男子生徒の視線がチラチラと向けられるのも頷ける、派手な容姿の美少女だった。

が、しかし。

「アイリーン・シャフィクよ。言うまでも無いと思うけど、間違いなく純血と謳われる聖28一族の一つであるシャフィク家、その次期当主よ。貴方たちは？」

これがまた、『いかにも』な純血主義のお嬢様であった。汽車の中で会った女の子が可愛く見えるレベルの高圧的な口調だ。その吊り上がった目はどうやら彼女の性格をそのまま映しているらしかった。

純血主義を好まないアレステットは眉を顰め、シルフィも早速苦手

意識を持ったのか口をへの字に曲げている。

唯一ニコニコ笑っているのはおさげの女の子だけだ。

勝手な憶測だがこの子はハツフルパフに行きそうだな、と思った。同時にこのアイリーンという少女はスリザリンに行くだろうと確信した。

「ハンナ・アボットだよー」

「??アレステット・フォウリー」

「???シルフィ・コールフートです」

満足そうに頷いていたアイリーンは、シルフィの姓を聞いて、ただでさえ鋭い眦をさらに吊り上げた。

「コールフート? 聞いたことが無いわね」

「それはそうですよ。父も母も魔法なんて知りもしませんでしたし。この魔法界と言うところでのマグルの生まれですから」

それを聞いて、明らかにアイリーンは馬鹿にするように鼻で笑った。瞳に宿る嘲りの色を隠そうともしていない。

「ふん。ホグワーツは世界一優れた魔法学校よ。そんなところに貴女のような下等な生徒が入学するなんて、恥ずべきことだわ。ホグワーツの名に泥を塗るつもりかしら」

これにはさしものハンナも憤慨するようにアイリーンを睨んだ。シルフィは突如浴びせられた謂れの無い中傷に戸惑っている様子だ。「ちよつと! なんてそんなことを言うの!?! わたしのママだってマグルの生まれだけど、すつごく優秀な魔女よ!」

すると、今度はその蔑むような視線がハンナに向けられた。

「アボット家は聖28一族の一つと聞いてたけれど、どうやらそれも過去の話だったようね。混血を生んだ、血の裏切り者。純血の風上にも置けないわ」

ハンナはショックを受けたように顔を青白くさせて俯いてしまった。

まるでハンナの生まれそのものを否定するような発言に、アレステットも我慢が効かなくなってきた。

腕につけた銀の腕輪が悲鳴をあげるようにチリチリと振動し、身体

から僅かに漏れ出した魔力が湖面を小さく波打たせた。

「おい——」

「さっきから黙って聞いてれば何ですかその言い草は!!? しかも、私だけじゃなくてアボットまで??!!? たかだかちよつといい家に生まれただけで人を馬鹿にして! 純血の何がそんなに偉いつて言うんですか!?!?」

ガバつと顔を上げてシルフィが立ち上がり、大声でアイリーンに怒鳴り散らす。あまりの剣幕に、アレステットは口から出かけた言葉を飲み込んだ。

アイリーンは一瞬鼻白むような顔をしたが、負けじと屹立して真正面からシルフィを睨みつける。

「純血はみんなマグル生まれなんかよりもずっと優れた魔法力を持っているわ。きつと貴女みたいなけど、??マグルで育った生徒はすぐに落第するに決まっているわ!」

アイリーンの言うことは学術的に全く根拠のないものだ。

純血が魔法力において優れている、というのは昔からよく純血主義が口にする考えだが、現実には寧ろ逆。純血を維持する為に近親交配を繰り返した結果、純血の家系は一般的な魔法族よりも遥かに奇形児やスクイブの割合が大きい。純血主義の将来は先の見えた袋小路だ。

??と長々とアイリーンに説明したところで、きつと彼女は聞く耳を持たないだろう。

だが、これは別にアイリーン個人が悪いわけではない。

恐らくは親から捏造された話を聞かされて育ったのだろう。それが正しいかどうか判断する能力を養うのは親による教育なのだから、鵜呑みにするのも仕方がない。純血主義の親の子が純血主義なのは必然とも言える。

「??もし純血が魔法力で優れていたとしても、そんな差、すぐに努力で覆して見せます。見てなさい、きつと貴女に吠え面をかかせてやりますよ!」

「なんて汚い言葉遣いなのかしら! これだからマグルは??」

強烈な眼光を放ち睨み合う二人にハンナはオロオロしている。かなり大声で怒鳴りながら喧嘩をしていたためか、周りのボートに乗った生徒たちはみんなこちらを見ていた。

「??とりあえず、二人とも座ってくれ。このままだとボートが転覆する」

予想では、きっと自分は彼女と同じ寮に行くことになる。なら、これから先アイリーンのような生徒と沢山関わることになるだろう。そう考えるだけで重苦しいため息が溢れた。

二人は船から降りるまでずっと睨み合っていた。

第3話 組み分け帽子

ホグワーツ城内の石畳を歩く列の最後尾で、シルフィは苛だたしそうに地団駄を踏んでいた。

「全く、なんなんですか、あの女は!!?」

「あんなのは純血の家系にはゴロゴロいる。あの手合いと馬鹿正直に付き合ってやる必要はない。無視すればいい」

それが賢い選択だし、アレステットもそうするつもりだ。

だが、シルフィは一方的に色々言われたのが相当腹に据えかねたように、遠目に見えるアイリーンの背を睨むようにしてブツブツと文句を言い続ける。ハンナは苦笑いで相槌を打っていた。

大男——ハグリッドというらしい——から新入生を預かった背の高い年老いた魔女、マクゴナガル教授に連れられて来たのは、小さな空き部屋だった。

「ホグワーツ入学おめでとう。新入生の歓迎会が間もなく始まりますが、大広間の席に着く前に、皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組み分けはとても大事な儀式です」

寮に関する説明は、大体アレステットが彼の母から聞いていた話と同じだ。学校生活の大半を寮で過ごすこと、4つの寮のこと、寮杯とそれに関するポイントのこと。

シルフィもアレステットから聞いたことと殆ど同じだった為か、暇そうだ。

「——間もなく全校列席の前で組み分けの儀式が始まります。学校側の準備ができたに戻ってきますから、静かに待っていて下さい。それから、できるだけ身なりを整えておくように」

エメラルド色のローブを翻し、マクゴナガル教授が部屋から出て行く。途端に新入生はざわざわと思いいいに話し始めた。

「??あれ、そういえば、寮ってどうやって決めるんですか?」

「いや、俺も知らない。それは伝統的に教えない決まりになっている

らしい。俺の母も入学してからののお楽しみ、の一点張りだった」

「テストとかあるのかなあ？ 私あんまり教科書とか読んでないからダメかもー??」

眉を八の字に曇らせてハンナが肩を落とす。

見回して見れば、テストがあるとか、トロールと一騎打ちするとか、物凄い苦痛を伴う、などという眉唾な噂話が横行していた。中にはブツブツと呪文を早口で暗唱する見覚えのある少女もいた。

「いや、それはないだろう。察に貴賤は無いというし、何かの評価が関係するとは思えない。何かするとしたら、性格診断とかの適性検査だと思っ」

ハンナは見るからにホツとして頬を緩めた。

「えっと、グリフィンドールは騎士道、ハップルパフは忍耐強さ、レイブンクローは機知、スリザリンは狡猾さ、でしたね」

「ママとパパはスリザリン以外ならどこでも、って言ってたなあ。でも、本当はグリフィンドールかハップルパフに入って欲しいみたいだったよー」

相変わらず嫌われ者のスリザリンだ。

特に彼らの親世代はモロ闇の帝王時代を生きたわけだから、歴代でもその嫌われっぷりは相当だろう。当時のスリザリン生の殆どの就職先は死喰い人だった。

対してグリフィンドールは大人気だ。何せ、校長であるアルバス・ダンブルドアを始めとした闇の陣営に敵対した多くの英傑たちがグリフィンドール出身だった。

とはいえアレステットからしたらどっちもどっちだ。スリザリンは兎も角、グリフィンドールの騎士道も聞こえはいいが、実際には頑固で思い込みが激しい者も多い。独善を振りかざして暴走することもあり、時と場合によつては純血主義よりも邪魔な存在になり得る。

「アボットはハップルパフな気がしますね。フォウリーは??」

「俺はスリザリンだろうな」

シルフィを遮ってそう言うと、二人は当惑したようにこちらに視線を向けた。

「フオウリーがスリザリン、ですか？」

「ああ。あの寮は血統で生徒をとるところがある。俺の知る限り、ウチの家系はほぼ全員スリザリン出身だ」

あの全くスリザリンらしからぬ母を想起する。闇の陣営に真っ向から歯向かった稀有なスリザリン出身生だった。

「??そうですか。私はきつとグリフィンドールです」

「だろうなあ」

スリザリンに組み分けされたアイリーンとグリフィンドールに組み分けされたシルフィが授業の度にいがみ合う姿が容易に想像できた。

「さつきアレステットはグリフィンドールとスリザリンは互いに不倶戴天の関係だと言っていましたか??」

「結局は、俺たち次第だろう。少なくとも、俺はコールフートのことを大切な友人だと思ってる」

「??私ですよ、フオウリー」

照れ臭そうに笑って答えるシルフィに、アレステットも思わず笑みが零した。

それを見てハンナがキラキラと目を輝かせた。頬を赤く染めてうっとりとしている。

「勿論アボットのことも——」

「私はいいのー!」

「えー??」

もしかして、嫌われてるのだろうか。

がくりと肩を落としたアレステットを無視して、ハンナは満面の笑みでシルフィに親指を立てた。目をパチクリとさせ、シルフィも困惑した表情で取り敢えず親指を立てる。

「応援してるよお、シルフィー」

「あ、あの、アボット? 貴女何か勘違いしてませんか??」

何を誤解してるのかは分からなかったが、これは後に引きずると間違いない面倒なことになる、とシルフィの勘が囁いていた。

分かってるよ。本人の前だもん、恥ずかしいんだよね。

だが、シルフィの言葉はそんな生暖かい視線の前ではすべて曲解されてしまうのだった。

マクナガルに連れられて大広間に入る。

視界いっぱい広がった幻想的な雰囲気、組み分けの緊張感も忘れて本日何度目か分からない感嘆の声が上がった。

何千という蠟燭が空中を浮かび、4つの長テーブルを照らしている。そのテーブルにはそれぞれの寮の上級生が着席し、穴が空くほどこちらをジツと見つめている。広間の上座には教授達が座っていた。かなりの広さだ。1000人以上が一堂に会してもなお余りある。豪邸に住むアレステットをして目を剥く広さだ。

高い天井には空を映す魔法がかけられているようで、ため息が出るようなほどの満点の星空が見える。

だが、この場に似つかわしくないものが新入生たちの前に置かれた。

マクゴナガルが持ってきた四つ足の小さな椅子の前に置かれた小汚い帽子。ところどころにツギハギのされたとんがり帽で、叩いたら埃が舞いそうなほどの年季ものだった。

勿論、ただの帽子ではない。

ピクピクと帽子がその身を震わし、口のようにぱつくりと割れた破れ目から歌声が響き渡った。

回りくどい言い回しだったが、要するにこの組み分け帽子はその人の資質や性格を見抜く力が宿っており、これを被れば自分に一番合った寮に入れてもらえる、ということらしい。

「フォウリーの言う通りでしたね」

「帽子を被るってのは予想してなかったけどな」

小声で囁き合っていると、マクゴナガルがジロリとこちらを睨みつけてきた。思わず背筋を伸ばし、慌てて正面を向いた。

マクゴナガルが羊皮紙の巻紙を手にして前に進み出た。順繰りに生徒を一人一人見渡す。

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組み分けを受けて下さい」

ABC順。アレステットは、ここにいる3人の番が早めに来ることに気づいた。

「アボット・ハンナ!!?」

びくり、とハンナが肩を揺らし、緊張した面持ちで前に行く。

まさかの一番手だ。

椅子に座り、帽子を被る。ハンナの小さな頭は帽子にすっぽりと隠れてしまった。

一瞬の沈黙の後、帽子が高らかに叫んだ。

「ハップルパフ!」

向かって右側のテーブルから歓声と拍手が上がる。ハンナがはにかみながらこちらを振り向いたので、アレステットとシルフィも微笑みながら小さく手を振った。

「ボーンズ・スーザン!」

「ハップルパフ!!?」

「ブート・テリー!」

「レイブンクロー!!?」

着々と新生生が組み分けられていく。たしかにこれならペーパーや面接よりも明らかに迅速で正確だ。

「コールフート・シルフィ!」

硬い顔をしてゆっくりとシルフィが前に出る。励ますようにシルフィの肩を叩いてやると、小さく頬を緩めた。

帽子を被る。

これまでよりも少し長めの沈黙の後、帽子が高らかに宣言した。

「スリザリン!」

思わず、アレステットは目をパチクリとさせた。

別にスリザリンだから、と偏見があるわけではないが、これはかなり意外だった。シルフィは間違いなくグリフィンドールに組み分け

されると思っていたからだ。

シルフィも予想していなかったのか困惑した顔を向けてきた。とりあえずアレステットは笑って応えた。

マグル生まれだからとスリザリン内でイジメにでもあったらどうしようか、と気を揉んでいると、アレステットもすぐにその名前を呼ばれた。

「フォウリー・アレステット！」

前に進み出ると、特にスリザリンの方から視線を感じた。大方同志が来たとも思っているのだろう。思わず辟易とする。

ふと先生たちが座る席に目を向けると、何人かがこちらを観察するように見ていた。

その中に嫌な顔を見つけて顔を顰めるが、立派なヒゲを蓄えた老賢者——ダンブルドアには会釈をしておいた。彼もニコニコと笑いながら小さく頷いてくれた。

帽子を被ると、周囲の音が遠ざかり、脳内がクリアになった。

かなり強力な開心術をかけられているようだ。脳に直接触れているこの至近距離では、生半可な閉心術では意味をなさないだろう。

『ふむ、難しい??非常に難しい。溢れんばかりの勇氣を持っている。誰かを思いやる誠実な心も持っている。勉学は嫌いのようだが、学ぶ心と素晴らしい頭の良さもある。敵と見なした者に対してはどこまでも残忍になれる。』

どこに入っても君はうまくやっていけるだろう。ここまで難しい生徒は珍しい。いやはやどうしたものか』

即決でスリザリンに選ばれると思っただけに、アレステットはうんうんと悩む帽子の声を聞いて少しだけ驚いた。

『いや、君の才能を考えれば、スリザリンが一番いいだろう。スリザリンに入れば、君は間違いなく偉大で強力な魔法使いになれる。君にはそれだけの力が眠っている』

(なら、そこにすればいい)

『だが、それは君の才能に限った話だ。君はどうしたい? 何を望む?』

望みは何か、か。ここで嘘を言っても仕方がないし、帽子を被っている以上すぐに見破られるだろう。

力も名誉も興味はない。でも、強いて望みを言うのであれば——
(そうだな。ここで一番、楽しめる寮がいい)

『ふむ、よろしい。であれば——』

「グリフィンドール！」

わああ、と割れんばかりの大歓声が響いた。そのあまりの喝采に、珍しくぽかんと間が抜けた表情を浮かべてしまった。

帽子を椅子に起き、グリフィンドールのいるテーブルに向かう。

これでアレステットはフォウリー家で初めてグリフィンボールに組み分けされたことになる。時代が時代なら家系図から抹消されていたかもしれないと思うと、あまり笑えない。

スリザリンのテーブルの方を向くと、シルフィが少し寂しそうな顔をしていた。一緒の寮になれるかもしれないと思っていたのだろう。それがまさか立場が入れ替わってしまうとは。

それでも、先程言ったセリフを覚えているのか、シルフィは笑顔を浮かべて祝福するように小さく手を振ってくれた。

席に着くと、周りの上級生が強めに肩を叩いたり、頭をわしゃわしゃしてきた。

「組み分け困難者だ！ 組み分け困難者が来たぞ！」

「組み分け困難者？」

先輩が言うには、組み分け帽子が5分以上どこの寮にするか迷った新入生のことを組み分け困難者と言い、非常に珍しい存在らしい。アレステットは10分近く悩んでいたそうだ。

大抵が優秀な生徒らしいので、こんなにグリフィンドールは喜んでくれるらしい。まあ、反対にスリザリンからはこれでもかというくらい睨まれているが。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

アレステットの次に呼ばれた女子生徒は、ホグワーツ特急の中で見た高圧的な茶髪の少女だった。ハーマイオニーという名前らしい。

「——グリフィンドール！」

これまた意外だ。あの少女はレイブンクロー向きだと思っていたのだが。

その後、ネビルもグリフィンドールに組み分けされた。人は見かけによらないということだろうか。

因みにドラコ・マルフォイという少年は凄まじい速さでスリザリンに組み分けされた。純血の中でもかなり排他的なマルフォイ家らしいと言えばらしい。

その後もつつがなく組み分けが進んでいく。そしてついに、ほぼ全ての生徒や先生が待ち望んでいた名前が呼ばれた。

「ポッター・ハリー！」

皆が前のめりになって固唾を呑んで見守る。

暫くして、帽子が叫んだ。気のせいか、これまで以上に神妙な声音の気もする。

「グリフィンドール!!？」

アレステットの時を遙かに上回る、雄叫びじみたグリフィンドールの歓声と他の寮の落胆の声。

上級生と固く握手を交わし、ハリーは熱烈な歓迎を受けた。照れ臭そうに頬をかく姿は、どこからどう見ても普通の男の子だ。とても闇の帝王を打ち倒した英雄には見えない。

「シャフィク・アイリーン！」

聞き覚えのある名前に、ハリーから視線を移す。緊張なぞ微塵もしていないのか、自信満々な表情と堂々とした態度で椅子に腰掛ける。振る舞い一つ一つが洗練されており、育ちの良さを伺わせた。

その揺らぐことのない姿勢は、自分がどこにいくか確信している様子だった。アレステットも勿論検討がついていた。

やはり、帽子はすぐに答えを弾き出した。

「グリフィンドール!!？」

「え？」

「聞き間違いだろうか。」

しかし、金髪の少女は可哀想なくらい顔を真っ青に染めてフラフラ

「??食べないのか?」

「??余計なお世話よ」

鼻を鳴らし、そっぽを向いてしまった。しかしその様子はどこか弱々しい。

はあ、とまたため息を吐いた瞬間に、アレステットの右腕が閃いた。ステーキの切れ端を刺したフォークを彼女の口に突っ込んだ。素晴らしい早業だった。

「むぐう!?!?」

目尻を吊り上げ、青色の瞳が刃のような切れ味を持ってアレステットを睨みつける。

だが、怒鳴ろうして口の中の肉を咀嚼すると、だんだんと目尻が下がってきた。

「何するのよ!」

「美味いだろ?」

「それは! ??そうだけど。でも、レディの口にいきなり食べ物を突っ込むなんてどんな神経してるのよ! なんて野蛮な?!」

「まあ、組み分けされてしまったものは仕方ないだろ。それに、悩むなら食べてからでもできるだろ? 取り敢えずはこのご馳走を楽しもうぜ」

アイリーンは無言で睨んできたが、そこに先ほどまでの圧力はない。

フン、と大きく鼻を鳴らし、アレステットの皿を奪い取ってステーキを食べ始めた。

思わず苦笑いを零す。本当にいい意味でも悪い意味でも子供のような少女だ。

ふと視線を感じる。

シルフィが抗議するようにこちらをジト目で睨みつけていた。言語化するなら『なんでその女と仲良くしてるんですか!』といったところか。勿論、思春期にありがちな初々しい嫉妬心とかではない。友達が嫌いな奴と仲良くしていたら誰でもいい気分はしないだろう。

困ったように頬をかく。

そんな3人の様子を遠目に見ていたハンナは、目を輝かせてうつとりと頬を染めていた。誰も知らない間に彼女の中で誤解は加速しているのであった。

ダンブルドアから学校で立ち入ってはいけないところや注意点を説明された後、歓迎会は幕を閉じた。立ち入ったら死ぬ場所など何だか聞き捨てならない忠告があったような気がしたが、ホグワーツでは当たり前のことなのかもしれない。

グリフィンドールの新生は、監督生のパーシー・ウィーズリーの後ろをカルガモのように続いて寮へとやってきた。途中でポルターガイストのピーブズに遭遇したが、追い払う元気があったのはパーシーだけだった。みんな満腹感と疲労で眠そうだった。

アレステットも一も二もなく悪霊退治の魔法でピーブズを追い払うようになるくらいには精神的に疲れてしまっていた。

「さあ、着いた」

太った婦人の肖像画に合言葉を告げると、肖像画が前に開いた。その先に、グリフィンドールの談話室が続いていた。

パーシーに促されて男子寮に続くドアから螺旋階段を登る。一年生は高いところに部屋があるのか、かなり階段を登る羽目になった。

黙々と歩いていると、隣を歩いていたネビルが遠慮がちに話しかけてきた。

「あ、アレステットだよ。僕、ネビル・ロングボトム。覚えてるかな？」

「いや、勿論覚えてる。トレバーはちゃんというるか？」

そう答えると、ネビルは嬉しそうに破顔した。トレバーをポケットから出すが、どうやら眠りこけているようだった。夜だというのに、本当にカエルかどうか疑わしいものである。

「ネビルの友達？」

前を歩いていた赤毛の少年が振り返り、アレステットを見た。釣られるように、隣にいたハリー・ポッターもこちらを向く。ハリーはアレステットの顔を覚えていたのか、小さくあつと呟いた。

「ポッターとは久しぶりだな。アレステット・フオウリーだ。よろしく」

「僕、ハリー・ポッター」

「僕はロン・ウィーズリー。ハリーとも知り合いなの？」

「杖の店だな」

すると、ロンは小さく肩を落としてため息を吐いた。

「いいなあ。僕なんてチャャーリーのお下がりの杖だよ。凄くボロいし」

ロンが取り出したトネリコの杖は、たしかにフォローのしようがないくらいに不良品だった。一角獣の毛が脇から跳ねだしてしまっている。

ウィーズリーの名は聞き覚えがあつた。アレステットの家にとまにやってくる母の友人たちがよく貧乏人とバカにしていた家系だ。それに同調する気は無いが、せめて魔法使いにとつて生命線とも言える杖くらい新しいのを買ってやれよ、と思わなくもない。

「それに、ペットも制服もお下がり。???そういえばキミのペットは?」「俺は連れて来ていないな。本当は猫が欲しかったんだけどな?!!」

雑談をしながら登っていくと、天辺高くに自分の名前のプレートが書かれたベッドを見つけた。

彼らと別れ、ルームメイトたちと挨拶を交わすと、みんなすぐにベッドに潜り込んだ。アレステットも清めの呪文で全身を綺麗にしてから布団を被った。

瞼の重みに逆らうことなく目を瞑る。

眠りに落ちる寸前、何故か組み分けが決まった後のことを思い出していた。

コウモリのような見た目の陰険そうな男。思い出すだけでムカム

カする奴。

だが、彼より強い印象を受けたのは、その隣にいたターバンを巻いた男。こちらを凝視するその姿を想起すると、アレステットは言いよらない胸のざわつきを覚えるのだった。

第4話 閑話 友情

入学式から数日が経った。

ホグワーツの授業は、正直に言えばアレステットにとって退屈なものが多かった。

というのも、既に彼の魔法の腕はヘタな7年生すら上回りかねない程のものであったため、杖を使う授業は復習にすらならないのだ。

例えば、変身術の授業では、初回だというのにマツチ棒を大きさも異なる見事な彫刻の施された金ピカの針に変えてみせた。これには厳格なマクゴナガルも目を剥き、グリフィンボールに5点もくれた。

それに対してハーマイオニーに思いつきり睨まれたのは言うまでもない。まあ、彼女もマツチ棒の色を変えることには成功してマクゴナガルに褒めそやされていたが。

呪文学や闇の魔術に対する防衛術は実践的な内容はまだで理論的なものが多かったが、アレステットにとっては常識として知ってるものばかりで、タメになる話とは言い難かった。

初歩の初歩なのは一年生なのだから仕方がない。これを積み重ねていくからこそ魔法が身につくのであるし、周りは大体そこからスタートしている。自分の知識に間違いが無いのか確認することも重要であるし、アレステットとしても文句を言うつもりは無い。だが率直に言って時間の無駄である、というのが現状だった。

では、杖を使わない科目に関してはどうかと言うと、それはアレステット生来の勉強嫌いのせいで台無しにしてしまっていた。

魔法史なんかはその典型だ。アレステットをして詳しく知らないことなど色々話してくれるのだが、彼は授業が始まって数分で夢の世界へと旅立ってしまった。

おおよその学生と同じように、教科書を読み、話を聞きながらペンを動かすだけの授業がアレステットにとって最大の苦痛であった。ましてや、魔法史を教えるビンズ先生の喋る口調はまるで子守唄のようだったのも拍車をかけていた。ハーマイオニーの射抜くような視

線が向けられたのは言うまでもない。

だが、ホグワーツの生活そのものが退屈かと言うと全くそんなことはなかった。

教室に辿り着くまでにこれでもかというくらい妨害してくる学校のギミックは面倒だったが、まるでパズルの攻略のようで飽きなかった。談話室で下らない雑談に花開かせるのは存外に楽しかった。常に一緒にいるような友はいなかったが、広く浅い友達付き合いは悪くなかった。

何より、隣にいただけで心地よい親友がいる。彼女のお陰もあつてか、ホグワーツの生活は概ね充実したものだだった。

だが、頭を悩ませる問題がないわけではない。

その唯一とも言える親友に関することだ。

昼ご飯を食べ終わり、中庭のベンチに向かう。入学式の翌日から数えてもう4回目にもなる習慣になっていた。

ライラックの木に囲まれ、周りからは見えないようにひっそりと佇むベンチ。密会にはもってこいの場所だ。

例えば、互いに険悪な仲の寮生がこっそりと逢うのにはぴったりだ。

ベンチの前には既に人影があつた。

それは別にいつものことだ。だが、今日に限っては普段と様子が違った。

小柄な少女を取り囲むように、3人の女子生徒がニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。全員がスリザリン生だ。

対して、目的の少女——シルフィは一步も引かず、真つ正面から3人を睨みつけていた。

パグ犬のような顔の女の子が、耳障りな声でシルフィを嘲る。

「彼氏はまだ来ないの？ 早くアンタみたいな醜女に相応しい物好き

の顔を拝んでやりたいわ」

「まさかスリザリンじゃないでしょ。ウィーズリーとか、ロングボトムじゃない？」

キヤハハ、と甲高く不快な笑い声が響いた。

「私が誰に会おうと、貴女たちには関係ありません」

毅然とした態度でぴしやりと言いのけるシルフィに、3人のスリザリン生の顔つきが険しいものになる。今にも杖を抜きそうな緊張感が走った。

見ているだけで虫唾が走る光景だ。危惧していた通り、シルフィは寮内で孤立しているようだった。あの3人は、シルフィが先日アレステットにぼやいていた純血主義志向が強いと思しき3人組だろう。

今すぐにも呪いをかけてやりたいところであるが、ここでグリフィンドール生のアレステットが出て行ったら余計シルフィが寮内で孤立しかねない。

どうしたものか、と頭を悩ませていると、その場凌ぎに過ぎないが上手く切り抜ける案を思いついた。念のために辺りに軽い認識阻害の魔法をかけてから、自分自身にも魔法をかけた。

ランチを終え、シルフィはいつものように中庭にやってきた。声をかけてくる人は誰もいなかったが、寧ろ都合が良かった。

薄いピンクを帯びた紫色の花を愛でながら、ホグワーツで初めてできた友を待つ。

アレステットとは、寮が分かれた後も変わらず友人であり続けた。

——というより、シルフィにはアレステット以外に友達と呼べるような生徒はいなかった。それがまた二人の友情を加速させたのは否めない。

これはシルフィのコミュニケーション能力が欠落しているとか、友

人は一人だけで充分と考えているとかそういう事ではない。きっと、他の??例えば、グリフィンドールとかだったら多くの友に恵まれていたことだっただろう。

問題は、スリザリンという寮の体質そのものにあった。

ホグワーツの創設者の一人、サラザール・スリザリンの意思を受け継ぐスリザリンは恐ろしいほど排他的な寮だ。他の寮には見境なく攻撃的だし、特にグリフィンドール相手には容赦がない。一方で、寮内の結束は他よりも断然固い。それを閉鎖的とするかは兎も角として、スリザリン生同士は総じて仲が良い。

だが、ここには一つ落とし穴がある。

スリザリン生が認める『仲間』とは即ち『純血』に他ならない。純血主義にとつてマグルの血とは忌むべき存在であり、同じ人間とすら認識していないのだ。

勿論、スリザリンの中には純血以外の生徒も多くいるし、マグル生まれの生徒もそれなりの数がある。だが、そういった生徒は純血と偽るか、純血の生徒に媚を売るのが普通だ。そうでなくては仲間外れにされてしまう。そうして純血の生徒の顔色を伺いながら、確かな上下関係の元で学校生活を送る。

だが、シルフィにそういったズル賢い生き方はできなかった。何より、彼女は決して自分の両親を恥じることなど無かった。

シルフィと純血主義の生徒たちが衝突するのにそう時間はかからなかった。

というか寮に入って自己紹介を交わした段階で既にシルフィと友達になろうという生徒は誰もいなくなった。シルフィとしても、尊敬する両親を平然と罵り、生まれだけで蔑んでくるような輩と友達になるなどこちらから願ひ下げだった。

ゆえに、友と呼べるのはアレステットだけだ。

それが哀しいこととは思わない。アレステットが隣にいてだけで安心するし、他愛ない話でも自然と頬が緩んだ。話題は尽きず、些細なことでも話が弾む。

そんな経験はシルフィの人生で初めての事だった。比喻抜きでア

レストレットとは今まで生きてきた中で最も波長の合う人物と言えた。シルフィはホグワーツに来て、無二の親友は百の知人にも勝る価値があると知った。

(フォウリーも、そう思ってくれているのでしようか)

心に暗雲が立ち込めるように急速に不安になる。

彼は、きつと自分とは違う。グリフィンボールでも人気者に違いない。本人はその気が無くても、彼にはその資質を溢れんばかり持っていた。

シルフィも初めて見た時は思わず動揺してしまったほど整った顔立ち。とても同年代とは思えない大人っぽい雰囲気。上級生にまで噂話が出るほど卓越した魔法の腕をもち、しかしそれをひけらかさない謙虚な姿勢。

きつと、数多くの友人がいることだろう。スリザリンですら談話室で女子たちの話題にのぼることもあるのだ。異性の友達もごまんといるに違いない。

もしかしたら、自分もその『いっぱいいる友達』の一人なのかもしれない。

それだけならまだいい。

恐ろしいのは、彼と疎遠になってしまうことだ。今はシルフィのために昼休みの時間を割いて会いに来てくれている。だが、もしかしたらいつか他の友達とのために来なくなってしまいかもしれない。

想像するだけで、急速に体温が下がっていくような気がした。小さく呼吸を整え、嫌なイメージを振り払う。

そろそろアレステットが来てもいい時間だ。そう思つて視線をあげて、盛大に顔をしかめた。

「うわ、本当にいた」

「へえー、こんなところで逢引なんてやるじゃない。その貧相な身体で媚び売ったのかしら。随分と物好きな男がいたものねえ。それとも、そういう趣味の男？」

ニタニタと厭らしい笑みを浮かべる3人組。パンジー・パーキンソンとミリセント・ブルストロード、ダフネ・グリーン格拉斯。

純血の中でも特に高貴とされる聖28一族の家系の娘たち。その発言力たるや既に寮内でも普通の上級生を上回るほどだ。

例によって純血主義者であり、シルフィによく嫌がらせをしてくる3人組だ。マグル生まれのくせに自分たちに楯突いてくるシルフィが気に入らないらしく、教科書を隠したり聞こえるような声で陰口を叩くなどの陰湿な嫌がらせをするスリザリン生の鑑のような輩である。

どうやら、ランチを食べ終わってすぐにコソコソといなくなるシルフィを怪しんで、後をつけてきたらしい。アレステットと会っていることは知らないようだが、なぜかは分からないが、男子待っていることを知っているようだ。

この状況はマズイ。

今のところ直接的な暴力などに至ったことは無いが、この人目につかないところだと数にものを言わせてくる可能性もある。

ローブの袖の中でこっそりと杖を手にして警戒しながら立ち上がる。まだロクな魔法は使えないが、無いよりはマシだろう。

「彼氏はまだ来ないの？ 早くこの醜女に相応しい物好きの顔を拝んでやりたいわ」

ぎり、と奥歯を強く噛みしめる。自分を馬鹿にされるだけならまだ良かったが、アレステットを悪く言うのは許せなかった。

あと別に彼氏とかではない。

「私が誰に会おうと、貴女たちには関係ありません」

三人組の顔から波が引くように笑みが失せ、代わりに瞳に剣呑な色が浮かぶ。

状況は圧倒的に不利だ。

体格のいいミリセント一人でも辛いというのに、おまけにそれなりに魔法が上手いダフネも合わさっては勝ちの目は無いに等しい。パングーはいるだけでウザい。正しく多勢に無勢。

じんわりと嫌な汗で杖を握る手が湿った。

「そこで何をしているのですかー！」

一触即発の空気を打ち破ったのは、ハリのある女性の声だった。おそらくホグワーツの学生であれば誰しもが聞き覚えのある厳しい声だ。

ずんずんとこちらに向かってくるエメラルド色のローブを着た魔法女の姿に、ミリセントたちは揃って顔を顰める。

怒りに顔を歪めながらずんずんとこちらにやって来るのは、マクゴナガルだ。

グリフィンドールの寮監であり、ホグワーツの副校長で、変身術の教師。大の堅物で、たとえグリフィンドール相手でも寮の得点を減点することに躊躇しないことでも有名だ。

イジメの現行犯とも言える（実際そうだが）この状況はかなりマズイ。一気に形成逆転されたミリセントは、忌々しそうに舌打ちをした。

「チクるんじゃないわよー！」

小さな声で釘を指すと、3人はそそくさと逃げるように退散していった。

「はあ??」

思わずため息を吐く。彼女達にバレた以上、もう明日からはここで会うわけにもいかないだろう。また新しい場所を探さなくてはいけない。

いや、だが。

そもそも、これ以上アレステットと会うのは、彼に迷惑をかけてしまうのではないか??? もしミリセントたちの標的がアレステットに向かったら??? 自分がアレステットのお荷物になってしまうのではないか???

「コールフート?」

心配そうな声音に、悪い方に巡らせていたシルフィの思考が断ち切られた。顔を上げると、いつの間にかマクゴナガルが目の前までやってきていた。

別にミリセントたちの言ったことに従うわけではないが、元よりマ

グゴナガルに嫌がらせに関して何か言うつもりはなかった。性格的に告げ口を好まなかったのもあるが、言ったところで何か事態がよくなるとも思えなかったからだ。

「いえ、何でもありません、マクゴナガル先生。彼女達とはただ雑談をしていただけです」

「??
??」

マクゴナガルが苦笑いを零す。厳格な彼女に似つかわしくないような表情に、思わず瞠目した。

パチン、とマグゴナガルが指を鳴らす。すると、エメラルド色のローブにノイズが走る。まるで、マグルの世界にいた頃のテレビのようだ。

気のせいかと思つて瞬きすると、ノイズはどんどん広がって、遂にはマクゴナガルの姿が霧のように消えてしまった。

そして、現れたのは、見覚えのある黒髪の少年。

アレステット・フォウリーその人に違いなかった。

「??フォウリー?」

「ああ。大丈夫だったか?」

からりとした笑みを浮かべ、隣に腰掛ける。それに倣ってシルフィも戸惑いつつもベンチに座った。

「もしかして、今のは変身術ですか? 人間に変身するのは上級生でも難しいと先生が言っていましたか?」

「んー、まあ、そんなとこだ。そこまで難しくないさ。コールフートも練習すればできるようになる」

「本当ですか? 今のところ授業の内容で精一杯なのですが?」

「基礎を理解すれば、応用はそれほど難しくくない。特に変身術はな。とりあえずはマツチ棒を針に変えることができれば、少しはコツがわかるようになる。」

もしよければ、明日の午後にでも一緒に練習するか?」

その魅力的な提案に、さつきまでの嫌な出来事が吹き飛ぶような気がした。

たしかに今のところ毎日会ってはいるものの、昼休みはあまり長く

無い。午後を目一杯彼と会えるというのは願っても無いことだった。咄嗟に首を縦に振ろうとしたが、それを邪魔したのは先の嫌な思考だった。

「?? コールフート?」

「?? やつぱり、ダメです」

ぎゅつとスカートの上で強く両手を握った。

様子の変わったシルフィを心配するような声音に、心の裡に澱のよう溜まっていた感情が堰を切ったように口から溢れ出した。

「さつきみたいなのは、これからも沢山あると思います。いえ、きつともっと直接的な行動に出るかもしれません。彼女たちの杖がフオウリーにも向けられるかもしれません。私と一緒にいると知られたら今度は貴方がグリフィンドール内で裏切り者扱いされるかもしれません。だから、」

「??」

「?? だから、もう??会わない方が、良いのかもしれませんが??」

心が悲鳴をあげているのに気づかないフリをしながら最後まで言い切り、強く目を瞑った。

「??」

「??」

二人の間に重たい沈黙が降りる。こんな居心地の悪い時間はこの数日間で初めての事だった。

「??俺と一緒にいるのは嫌か?」

「そんなことはありません!」

それだけは絶対に否定しなければならなかった。本当は嘘でもそう言って遠ざけることが彼のためだと分かっていた。だが、それを偽ってしまえば、短くも楽しい数日間が本当に嘘になってしまうような気がした。

「フオウリーという時間はとても楽しかったです! 私にとって、貴方という時がホグワーツで一番楽しい時間です。ですが、だからこそ??」

「俺も同じだ」

そのセリフに、息がつまる。それはシルフィが心の奥底で真に欲していた一言だった。

「俺もコールフートと一緒にいたい。俺にとって、寮の皆に嫌われることよりもお前と話せなくなるの方が辛いんだ」

「???
???」

目尻から溢れた雫が頬を伝った。慌てて裾で拭うが、ボロボロと溢れ落ちる涙の雨はすぐにシルフィのローブに染みを作った。

「いいんですか??? スリザリン生に背後から襲われるかもしれませんよ???」

「上級生だろうが監督生だろうが返り討ちにしてやる」

「寮内でイジメにあうかもしれないよ。私みたいに教科書を隠されたりするかも」

「そんなことされてたのか??. 今度盗難防止の呪いを教えるよ」

「私以外の友達が誰もいなくなるかもしれないよ」

「コールフートがいればそれでいい」

もう限界だった。決壊したダムのように流れ落ちる涙に構わず、アレステットの目を見返した。

「??本当の本当がいいんですね。責任とってもらいますよ。返品不可ですからね。後悔しても知りませんよ」

「お前こそいいのか? さっき言ったことはお前にも言えるだろう。グリフィンドール生の俺と友達だってバレたら俺よりもマズイんじゃないか?」

「??私にとって、スリザリン生みんなに嫌われるよりも貴方と会えないことの方が辛いのです」

意趣返しにそう言っていると、アレステットは意表をつかれたような表情を浮かべた。思わずしたり顔が浮かぶ。

「ふふ。では、もう遠慮しませんよ。フォウリーも覚悟を決めてもらいますからね?」

「望むところだ」

遠くで予鈴の鐘の音が鳴った。シルフィはアレステットの腕を掴み、校舎に走り出す。すれ違う様々な色のタイの生徒が怪訝そうに振り向くが、全く気にならなかった。

涙はいつの間にか止まっていた。

第5話 魔法薬学

アレステットが何だか色々とおつ恥ずかしいことを言った翌日、地下牢にて魔法薬学の時間がやってきた。

因みにこの授業、スリザリンとグリフィンドールの合同授業である。既にスリザリンの意地悪に晒されてきたグリフィンドール生にとって、1週間で一番嫌な授業である。

「顔色が悪いですね??。やはり、これはやめといた方が良かったですか???」

眉根を寄せてシルファイが不安そうにこちらを見た。

ほぼすべてのグリフィンドール生とスリザリン生が、まるでそこに境界があるかのようにハッキリと別たれている中、後ろの方の席で二人は隣り合って座っていた。

「どうやら昨日言っていたことに嘘偽りはないらしい。教室にやってきたシルファイは迷うことなくフォウリーが座る横の席に陣取ってきた。」

教室の端っことはいえその様子はとても目立つのか、辺りから色々な視線を向けられている。勿論好意的なもの一つもないし、なんならそれぞれどちらの寮からも睨まれている。

しかし、今のアレステットとしてはそんな有象無象の視線などどうでも良かった。首を振って否定する。

「いや、そのことじゃない。昨日言っただろ?」

「では、どうしたのですか?」

「??この授業の先生が苦手なんだ」

「スネイプ先生ですか?」

スリザリンの寮監でもあり、この授業の担当でもあるセブルス・スネイプ。アレステットにとってこのホグワーツで最も顔を合わせたくない人物だった。

「スネイプ先生に何か問題があるのですか?」

「いや、まあ???個人的なことだ」

適当に誤魔化すと、事情を話してくれないことが不満なのかシルフィは小さく頬を膨らませた。ジト目を送る姿に少しばかりの心苦しきを感じたが、アレステットとしては理由を説明するわけにはいかなかった。

(ダンブルドアの真意はわからないが??。あえて泳がしている可能性が高い)

セブルス・スネイプはアレステット・フォウリーにとって不倶戴天の敵だ。

そしてダンブルドアにとっても敵、のハズだ。どちら側のスパイであるかは言うまでもなく承知しているだろう。しかしあえて手元に置いておきたいということなのであれば、アレステットがその思惑を潰すわけにはいかなかった。

??というのは頭では理解しているつもりだが、納得はできなかった。本心では、今すぐにでもこの手で打ち倒したい相手だ。

そんな非常に重たい話をシルフィに言うことはできなかった。それに、シルフィが全く意図しないところで情報が流出してしまう恐れもあったし、彼女を危険に晒してしまう可能性もある。

「??そういえば、この授業のあとのことだけど」

強引に話を変えると、追及されて欲しくないと悟ったのかシルフィも乗っかってきてくれた。

「覚えていてくれたんですね」

シルフィは髪先をソツと撫でながら嬉しそうにはにかんだ。昨日はなんだか有耶無耶な感じで流れてしまったが、アレステットは忘れていなかった。あの後適当な場所を探しておいたのだ。

「この授業が終わった後すぐでも大丈夫か?」

「ええ、勿論です。場所はどうしますか?」

「マクゴナガルに頼んで空き教室を一つ貸してもらった」

「マクゴナガル先生がですか? 意外です」

それにはアレステットも同意だ。渋られるかと思っただが、予想外にマクゴナガルはすんなりと了承してくれた。堅物という言葉が服を着たような人物であるが、向上心のある生徒と、何だかんだグリフィ

ンドール生には結構甘いらしい。

アレステットがマクゴナガルに個人的に気に入られている、というのもあるかもしれない。もつとも、それ以上にお気に入りのおハーマイオニーにはもつと便宜を図っているのだが。

スネイプは、授業が始まる数分前にやってきた。一体何日洗っていないのかわからないほどギトギトした髪の毛を固めた、鼻の高い男だ。やけに丈の長いローブの裾がコウモリを連想させる。スリザリンの寮監に相応しい陰険そうな人物である。

やってきたスネイプに教室が静まり返る。グリフィンドール生の方をチラリと見やり、ハリーがいることを確認するとつまらなさそうに鼻を鳴らした。

大体の授業と同様、スネイプも出席を取っていった。スリザリン生にはどこか優しそうな声色に感じたのはきつと気のせいではないだろう。

アレステットの名前を読み上げる際、ほんの少しではあるが名簿から顔をあげた。

目を細めてアレステットを見やり、それから横に座るシルフィに視線が振れる。

その時、それまでの能面のような顔に僅かな綻びが生じた。

不思議な表情だ。懐かしむようでもあるし、後悔しているようでもある。怖れているようにも見え、憤っているようにも見え。一言で形容するのは難しい。とにかく複雑な表情だった。

しかしそれも一瞬のことで、すぐに二人から視線を切ると点呼を続けた。

本当に短い時間だったので、その変化に気づいたのはアレステットとシルフィくらいのものであった。

どうやらスネイプもスネイプで何か浅からぬ感情をアレステットに抱いているらしい。別にそのことを問い質すつもりはなかったが、シルフィは少し気になって隣に顔を向けた。

「??ッ」

思わず、息を呑む。

アレステットは、これまでに見たことのないような顔をしていた。スネイプの目を射抜くように睨みつけ、口を真一文字に結んでいる。憎悪に顔を歪め、身体から無意識に溢れる魔力が前髪を揺らしていた。

気のせいか、いつもは暖かな色を帯びている琥珀色の瞳にチカチカと紅い光が点滅しているようにも見えた。

「アレステット???!」

思わず呼びかけるように彼の名前を呟く。シルフィには、このまま彼を放っておいたらどこか遠くに行ってしまうような気がしてならなかったのだ。

「どうした?」

さつきまで憤怒の形相がまるで嘘のように、いつもの顔でシルフィに振り向く。それに安堵の気持ちを抱くには、あの表情は壮絶すぎた。だが、素知らぬ顔でこちらを見るアレステットにそれ以上何か言うこともできなかった。

点呼がハリーの番まで来た時、明らかにスネイプは嫌味っぽく笑った。仄暗い感情を隠そうともせず、猫なで声で冷やかすように言う。

「ああ、さよう。ハリー・ポッター。我らが新しい——スターだね」
前の席で数人のスリザリン生がクスクスと笑い声をあげた。

出席をとりおえ、スネイプが昏い瞳で教室を見渡した。アレステットの目だけは意図的に見ないようにしているようだった。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学ぶ」
それから、スネイプ教授による魔法薬学の有り難い高説が始まった。杖を使わない科目、ということと舐めた気持ちで来ていた生徒たちも聞き入ってしまうような演説だった。

ハリー・ポッターの受難は、そこから始まった。

「ポッター! アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか?」

唐突にスネイプが名指しで質問する。ハリーは困惑した顔で隣に座るロンを見るが、ロンも同じような顔をしていた。

「わかりません」

「チツ、チツ、チ——有名なだけではどうにもならんらしい。」

では、もう一つ聞こう。ベゾアール石を見つけてこいと言われたら、どこを探すかね？」

「わかりません」

「クラスに来る前に教科書を開いて見ようと思わなかったわけだな、ポッター、え？」

チラリとアレステットは机の上の新品の教科書を見た。勿論ページも開いていない。というか、殆どの生徒はそうだ。これはハリーが悪いわけではない。

しかしアレステットは教科書は読んでいないが、家にあつた専門書で知識はあつたため答えは知っていた。もつとも、手を挙げたところで黙殺されるのがオチだ。天を衝くようにピシリと手を挙げ続けているハーマイオニーがいい例である。

「ポッター、モンクスフードとウルフスベーンとの違いは何だね？」

「わかりません。ハーマイオニーがわかっていると思えますから、彼女に質問してみたらどうでしょう？」

よくやった、とばかりにグリフィンドール生を中心に笑い声という名の喝采が起こった。勿論スネイプがハーマイオニーを指名するとはなく、不快げに顔を歪めて座らせた。

「教えてやろう、ポッター。アスフォデルとニガヨモギを合わせると、『生ける屍の水薬』と呼ばれる強力な眠り薬になる。ベゾアール石は山羊の胃から取り出す石で、大抵の薬に対する解毒剤となる。モンクスフードとウルフスベーンは同じ植物で、別名をアコナイトとも言うが、マグルではトリカブトと呼ばれている。どうだ？ ??諸君、なぜ今のを全部ノートに書きとらんのだ？」

皆が一斉に羊皮紙に羽ペンを走らせた。アレステットも嫌々ながら羊皮紙にグリグリと書き殴った。

「ポッター、君の無礼な態度で、グリフィンドールは一点減点」

無茶苦茶だ。グリフィンドール生からは同情的な視線を、スリザリン生からは嘲るような視線を向けられた。憤ったようにスネイプを見る奇異なスリザリン生はシルフィだけだった。

スネイプは生徒を二人一組でペアにして、おできを治す簡単な薬を調査させた。アレステットは隣にいるからという理由でシルフィと組まされた。スリザリンとグリフィンドールのペアは二人だけだった。まあ、願ったり叶ったりだったので文句はない。

「あんなの、理不尽すぎます。スネイプ先生は一体ポッターになんの恨みがあるのでしょうか？」

蛇の牙を砕くアレステットの隣で、干イラクサを秤に乗せながらブツブツとシルフィが文句を呟く。ぎりぎりスネイプには聞こえない声量だ。

やはりスリザリンらしからぬ態度に思わず苦笑いを零す。

(まあ、そりゃあ憎いだらうよ)

スネイプがハリーに対してあそこまで辛辣な態度を取る理由は大體察していた。考えうるのは二つだが、まあどちらにせよロクなものじゃない。

件のスネイプが近寄ってきたのを見て、シルフィが黙る。アレステットも真面目な顔を取り繕い、その蝙蝠男の存在を無視するように作業に没頭した。

隣では、ハーマイオニーとアイリーンが互いの方を極力見ないようにしながら無言で作業を進めていた。非常にギスギスした雰囲気だ。アイリーン・シャフィク。純血主義を絵に描いたような性格の彼女は、案の定グリフィンドール内で孤立していた。

差別傾向の強いスリザリンに対し、グリフィンドールは血筋で判断することはない。当然マグル生まれの数もスリザリンの比ではない。そんな中で純血以外を見下すアイリーンは当然誰とも仲良くなれず、当の純血の家系の生徒にも嫌われる始末だった。

黙っていれば美しいその容姿に吸い寄せられる男もいないわけではなかったが、その圧倒的なまでの高飛車かつ高圧的な性格を見てた

ちまち逃げ去ってしまった。

その性格ゆえにシルフィのようにイジメられることこそないが、厄介者扱いされているというのが現状だった。

ハーマイオニーと組まされているのは、彼女もまたアイリーン程ではないが寮内で孤立しているから、はみ出し者同士でスネイプがくっつけたのだろう。

が、この二人の相性は最悪である。談話室でも何度か喧嘩しているのをアレステットは目撃したことがあった。授業中ゆえ静かではあるが、スネイプが退室すれば強烈な罵り合いを始めることだろう。

アレステットは何かの手違いで組分け帽子がシルフィとアイリーンの入る寮を取り違えたのではないかとすら思っていた。

「素晴らしい、マルフォイ。みな、こちらに来るといい。角ナメクジを茹でる手本になることだろう」

スネイプはどうかやらマルフォイとやらが相当お気に入りのようなふうだ。ふんぞり返るようにして胸を張るプラチナブロンドの髪をオールバックにした少年をこれでもかというほど煽っていた。

「マルフォイ？」

「ええ。ドラコ・マルフォイ。嫌味なヤツですよ」

家柄だけで判断するのは好きではなかったが、どうかやらドラコはアレステットの知るマルフォイの家訓をしっかりと受け継いでいるようだった。

蛙の子はどこまでも蛙か。アレステットは小さくため息を吐いた。

「——きやあッー！」

短い悲鳴とともに、強烈な緑色の煙が地下牢のような教室に立ち込める。反射的に右手を振り、自分とシルフィを守るように魔法の盾を張った。降りかかった緑色のドロドロとした液体が、透明な壁に阻まれて空中に滴った。

出どころを見れば、どうかやら近くで作業していたネビルが調合に失敗したらしい。ネビルは失敗した魔法薬をモロに被ってしまい、全身が真っ赤なおできで膨れ上がってしまった。

「バカ者ー！」

スネイプが杖を一振りすると辺りに撒き散らされた薬を取り除いた。

ペアのシエーマス・フィネガンにネビルを医務室へと連れて行かせると、血走った目をネビルの隣にいたハリーに向けた。

「ポッター、針を入れてはいけないとなぜ言わなかった？ 彼が間違えば、自分の方がよく見えると考えたな？ グリフィンドールはもう一点減点」

あまりの理不尽にハリーが言い返そうとするのを、ロンが止めた。正しい判断だ。反論しても減点されるだけだ。

去っていくネビルの姿を、複雑そうな表情でアイリーンが見ていた。

昼休憩を挟んだ放課後。

ひっそりと教室で、しばらく雑談を交わした。夕食まで時間はたっぷりとある。それにそこまで急ぐようなことでもないののでついつい長話をしてしまった。

「さて、そろそろ始めるか。理論は理解しているか？」

「ええ。完璧、とまでは言いませんが??」

机の上に開かれたアレステットの教科書をおさらいするように眺める。小難しい内容を出来るだけ分かりやすく要点をまとめた注釈が書き込まれている。

昨晩頭をひねり回しながら作成したものだ。アレステットは圧倒的に感覚派なので、それを理論に落とし込むのは非常に骨が折れた。そのため少し寝不足なのはシルフィには秘密である。

「ではやって見なさい、ミス・コールフート」

「はい、フォウリー先生」

全く似ていないマクゴナガルの真似はどうやらシルフィにウケたらしい。前にやった時はネビルにさえ失笑されたのだが。

肩の力が抜けたのか、シルフィは緊張することなく軽やかに杖を振るう。僅かに魔力光が煌めくが、マツチ棒に変化は見受けられなかつ

た。

「ダメですね??」

「何を考えながら杖を振った?」

「え? それは勿論教科書の内容ですけど??」

やはり、とアレステットは納得するように頷いた。これは変身術に限った話じゃないが、と前置きをした上で話し出す。

「理論は基礎だ。それを理解した上で、更に重要になってくるのがイメージだ」

「イメージ、ですか?」

「そうだ。理論を意識しすぎているからなかなか上手く成功しないんだと思う。次は深く考えずに、マッチ棒が針に変わる様子をイメージしながら杖を振ってみてくれ」

変化は劇的だった。形状こそ変わらなかったがマッチ棒は僅かに、しかし確かに銀色の光沢を帯びた。

シルフィは嬉しそうに破顔する。

「今までうんともすんとも言わなかったのに??。フォウリーは教師に向いてるのかもしれないですね」

「だろ? ??と言いたいところだけど、実は俺に変身術を教えてくださいな人の受け売りなんだ」

因みに、その師は名実ともに世界最強の魔法使いでもある。

アレステットは別にそんなこと言われるまでもなく感覚で変身術を行使できたために話半分で聞いていたが、役に立つ日が来るとは思ってもみなかった。

シルフィはその後何度か杖を振るって試行を重ねた。徐々にではあるが、マッチ棒が変化する部分は大きくなっていった。

だが、マッチ棒全体が銀色に変わるまではサクサクだったが、肝心の形状変化でまた詰まってしまった。

上手くいかない自分に腹を立てたのか、眉を寄せながら遮二無二杖を振るう。だが集中力も切れてきたのか結果は芳しくない。

「少し休むか?」

「??はい」

今のまま続けても意味がないと分かっているのか、シルフィは悔しそうな表情を浮かべながら手近の椅子に座った。ずっと魔法を使っていた反動で精神的疲労が一気に襲ってきたらしく、大きくため息を吐いた。

ぐったりと椅子に座るシルフィの前に、気分転換も兼ねて銀色の包みを置く。前にホグワーツ特急の中でも見せた、蛙チョコレートだ。魔法界には珍しく普通のチョコレートだが、この商品が絶大な人気を誇るのにはオマケとしてついて来る魔法のカードにある。

伝説・史実問わず偉大とされる魔法使いを映したカード。魔法界きつての人気商品であり、大人でもマニアは数多くいる。

「そういえば、蛙チョコレートのカードはスリザリンの男子の間でも流行っているようでしたね。男の子はこういうのに惹かれるものなのですか?」

「まあな。俺も一時期かなりハマっていた」

そこら辺の感覚は女子にはわからないらしい。アレステットにとっては少し甘すぎるチョコレートを齧りながら、小鬼の映ったカードをつまらなさそうに眺める。

「グリーンゴッツ? どこかで聞いた名前ですね」

「お、レアカードだな。魔法史でやったんだろ。魔法界で最も安心・安全を謳うグリーンゴッツ魔法銀行の創設者だ。まあ、最近その名声も地に墜ちたが」

鞆から取り出した日刊予言者新聞を机の上に放る。内容は、正にそのグリーンゴッツに賊が侵入したというものだ。幸いモノを盗られることは無かったようではあるが、安全性が疑問視される、と綴られている。

一通り目を通したシルフィが顔を上げた。

「犯人は何も盗らないで帰ったのですか?」

「目的の物が無かったらしい。だが、ダイアゴン横丁の本店にはイギリス魔法界の9割以上の富が貯蔵されている。それを全て無視したとなると、とんでもない価値のモノということになる」

「それはなんというか??想像もつきませんね」

もしそんなものがあるとしたら、かの名高き『死の秘宝』にも匹敵するレベルのお宝だ。校内でも、賊の正体よりもそつちに関する眉唾な噂が流れていた。中には本当にニワトコの杖や蘇り石なのでは、と言う者もいた。

「??さて、そろそろ再開しましょうか」

「もういいのか?」

「ええ。時はガリオンなり、と言うのでしよう? それに、早くできるようなった方がもつと話せますしね」

照れるようにそう言って立ち上がる姿に、先程までの焦りは見受けられない。

どうやらカードはお気に召さなかったが、チョコレートの方は効いたようだった。

「??わかった。じゃあ、次は俺が手本を見せるからそれに続いてコールフートも試してみてください」

残念ながらその日の内にシルフィが完璧に成功することはなかった。それでも、僅かながらコツを掴めたようだ。彼女がマッチ棒を立派な針に変える日が来るのもそう遠くないだろう。

僅かに先端の尖った銀のマッチ棒を嬉しそうに胸の前で握りながらはしゃぐシルフィを見てそう思った。

第6話 飛行訓練

「マグルは『ひこうき』とかいう仰々しい鉄の箱に乗らなきゃ空も飛べないのでしょう？ 1人じゃ何もできない、全くもって惨めな生き物ね。いつそ憐れでもあるわ」

「飛行機は箒と違って同時に何十人も運べるわ。それも、箒よりも高い位置を、箒より速くね」

「??間違いなくアンタは箒を使えないわ。飛行術は才能がものをいうもの。足りない魔法力をお勉強で補うのとはわけが違うわ」

「あら、杖で劣っている自覚はあったのね」

隣で繰り広げられるアイリーンvsハーマイオニーの舌戦を無視しながら、もそもそとパンを咀嚼する。

もうグリフィンドール生はすっかり見慣れたものなのか、こちらに見向きもしない。仲裁役を押し付けられたアレステットは早々に匙を投げていた。

毎回アイリーンが何か嫌味を言い、それにハーマイオニーが言い返して口論になるといのがお決まりのパターンだ。今日の論題はどうやら午後に控えた飛行訓練のここのようである。

みなもそのことで頭がいっぱいなのか、そこかしこで口々に自分の箒について自慢しあったり、クイディッチ談義に花を咲かせたりしていた。

正しくその授業への不安でいっぱいだ、という顔をしたネビルが眉を八の字にしてアレステットの傍までやってきた。

「アレステットは箒に乗ったことある？」

「ああ。まあ、あんまり得意じゃないけどな」

「??僕、一度も箒で空を飛んだことが無いんだ」

珍しいな、と少し驚いた。魔法族の子どもであれば年端もいかない頃から箒に乗るのが普通だ。マグルの小学生みんなが自転車に乗れ

るのと同じように。それもロングボトム家という純血の大家とくれば尚更だ。

「どうやら話に聞くネビルの祖母は何だかんだ過保護すぎるくらいがあるようだ。」

あんなことがあつた後だから仕方のないことかもしれないが。

「しかも、スリザリンの奴らと合同授業だなんて！ 飛べなかつたら、きつと、マルフォイにすぐくバカにされる！」

「だったら練習して見返してやればいい。あいつの自慢話は9割9分嘘だろうからな。あのほら話ほど上手くはない」

しかしそんな言葉もネビルには届かない。どこからか取り出したクイディッチ今昔という分厚い本を穴が空くほど読み始めてしまった。

肩を竦めて食事を再開する。

「純血！」

「マグル！」

隣ではもはや悪口かも分からない罵声が飛び交っていた。

結局、二人は今日も朝食を食べ損ねたらしい。

ついに箒の飛行訓練の時間がやってきた。

場所は校庭からは黒々とした「禁じられた森」が遠目に見えるクイデッチ練習場だ。平坦な芝生の上には古ぼけた箒がずらりと整列されていた。

「本当にこれで飛べるのですか？」

「???」

ゴミ捨て場に落ちていても不思議ではない程オンボロの箒をしげしげと見ながら不安そうにシルフィが呟く。アレステットは即座に答えられなかった。

クイディッチ界ではそれなりに有名な『流れ星』と呼ばれる箒だ。

抜群の安さと桁外れの不安定性をもつ逸品である。

「おや？ 誰かと思えば、スリザリンに入り損ねたフォウリーくんじゃないか。相変わらずそのマグル生まれにご執心のようだね」

ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべながら、銀髪をオールバックにした少年が話しかけてきた。両脇にはガタイのいい男子をまるでボディガードのように従えていた。

ドラコ・マルフォイ。簡単に言えばパンジー・パーキンソンの男バージュンである。ハリーやロン相手ほどじゃないが、事あるごとにアレステットに絡んでくる、嫌味なやつだ。

「マルフォイか。何の用だ？」

そのどうでも良さげで素っ気のない返事に一瞬怒りに顔を歪めるが、マルフォイはすぐに貼り付けたような笑みを浮かべた。その視線は明確に隣のシルフィを蔑んでいる。

「マグル生まれに媚びを売ってまでスリザリンとの繋がりが欲しいのかい？ キミがどうしてもというなら父上に掛け合っただけでもいいけど？」

「不要だ。そういうお前の親父は相変わらず権力に媚びを売っているようだな。流石、アズカバン逃れしただけのことはある」

今度こそ明確にマルフォイの顔に朱が差した。横で控えていたクラップとゴイルが前に出てきてアレステットを威圧する。

いつにも増して攻撃的な姿勢を崩さないアレステットに、シルフィは困惑を隠せない様子だった。

遠巻きには遅れてやってきたグリフィンボール生がこちらの様子を伺っていた。

「僕の父上を愚弄するのか、血を裏切る者め！」

「へえ、マグルの富裕層に媚を売りまくっていたマルフォイ家の言とは思えないな」

マルフォイは何のことか分からない、という表情を浮かべた。案の定マルフォイ家は今の自分たちに都合の悪い事実を抹消して生きているようである。

「わけのわからないことを――」

「何をぼやぼやしているのですか！」

気色ばむマルフォイを鋭い女性の声が遮った。教科担任のマダム・フーチだ。マルフォイは一瞬アレステットとシルフィを睥睨し、慌てて取り巻きたちを引き連れてスリザリン生の下へと戻っていった。

当然のことだが、シルフィは全く戻る気配もなくアレステットの隣にいる。例のごとくグリフィンドール生達から痛いほど視線が突き刺さった。

「あら？ 何でここに『スリザリンの面汚し』がいるのかしら」

「おや、『グリフィンドールの恥晒し』ではありませんか。奇遇ですね」

偉そうな歩みで優雅に歩いてきたアイリーンとシルフィが視線で火花を散らせながら睨み合う。いつだかアレステットが予測していたのと同じ状況だ。もつとも、立場は反対だが。

「そこ、何を騒いでいるのです！ みんな箒の傍に立って。さあ、早く！」

二人は同時に視線を切り、極力視界に入れないよう意識しているように振る舞った。何度かアレステットは無視するように進言しているのだが、シルフィはいつも売り言葉に買い言葉で喧嘩を始めてしまう。どうやら心底アイリーンのことが気に食わないらしい。

「杖腕を箒の上に突き出して。そして、『上がれ！』と言う」

意外にもシルフィは一発で手元に箒が収めた。対してアイリーンは焦ったように何度も声を上げるが、コロコロと芝の上を転がるだけだった。

因みにアレステットの方はうんともすんとも言わない。

「おや、シャフィク家次期当主様は箒を掴むこともできないのですか？」

その無様な様子を目ざとく見つけたシルフィがニヤリと笑い、これ見よがしにアイリーンを馬鹿にする。何というか、その表情はたしかにスリザリン生らしいものだった。

「うるさいわね！ このボロ箒が悪いのよ！ それに、フォウリーもできて無いじゃない！」

「アクシオ、来い」

「ちよつと!!?」

その後、フーチが一人一人に杖の握り方を指導していった。

シルフィはフーチからその見た目に似合わぬ懇切丁寧な説明を受けた。流石に握り方は正しかったのか、アイリーンはフーチにその姿勢を褒められ、先のお返しと言わんばかりにドヤ顔をかましていた。初めてなのだから当たり前なのだが、何故かシルフィは猛烈に悔しがっていた。

「さあ、私が笛を吹いたら、地面を強く蹴ってください。箒はぐらつかないように押さえ、二メートルぐらい浮上して、それから少し前屈みになってすぐ降りてきてください。笛を吹いたらですよ——一、二の——」

「うわあああつ?!?」

緊張に耐えられなかったのか、ネビルがフライングで空を舞ってしまった。箒を制御できていないのか、空中をぐるぐると不規則に回転している。みるみるうちにネビルの背中が小さくなっていった。

「こら、戻ってきなさい!」

マダム・フーチが焦ったように懐から杖を出そうとするが、気が動転しているためかその動きは緩慢だ。既にネビルは箒から投げ飛ばされ、十メートル程の高さから自由落下を始めていた。このままでは間に合うまい。

瞬間、アレステットの右腕が閃いた。

目にも止まらぬ速度で腰から引き抜かれた杖がぴたりとネビルに照準を引きしぼられる。

周りの生徒がその動きに気づくよりも速く、正確に魔法が行使された。

「アレスト・モメンタム」

芝生の数十センチ上で、まるで時間が止まったようにネビルの身体が空中に縫い付けられた。

杖の動きに合わせてゆっくりと芝生の上に横たえられるネビルに、しばし固まっていたフーチがようやくやく再起動した。

慌ててネビルのそばまで駆け寄って抱き上げる。

怪我はないようだが、あまりのショックに気を失ってしまった。

「私がこの子を医務室に連れて行きますから、その間誰も動いてはいけません。箒もそのままにして置いておくように。さもないと、クイデイツチの『ク』を言う前にホグワーツから出て行ってもらいますよ。それと、フォウリー。素晴らしい機転と魔法でした。グリフィンドールに10点差し上げましょう」

わっ、とグリフィンドールが湧いてアレステットを褒め称えた。さつきまでアレステットを疎んでいたというのに、全く現金なやつらである。一方でスリザリン生たち（とハーマイオニー）は親の仇を見るような形相でアレステットを睨んでいた。

おそらく魔法で軽くしているのだろう、ネビルを軽々と抱えたフーチが見えなくなると、ネビルが危惧していた通りドラコを中心としたスリザリン生達が笑い声をあげた。

「あいつの顔を見たか？ あの大間拔けの」

嘲るマルフォイに、パーバティ・パチルが苦言を呈する。一瞬だが、マルフォイが言葉を詰まらせた。美人に弱いのは年齢に関わらず男の性らしい。

マルフォイに代わり、パンジーが冷やかすように言い返す。結果として、いつものように二つの寮生達は真っ向から睨み合った。

「ごらんよ！ ロングボトムのばあさんが送ってきたバカ玉だ」

マルフォイが草むらから取り出したのは、今朝フクロウ便でネビルの下に届いたビー玉より少し大きいガラスの球体だ。

「アレは何ですか？」

『『思い出し玉』だ。何か忘れモノや忘れてる予定とかがあると赤く光る』

「へえ、それはなんとも便利な??ん？ それって便利ですか？」

光るだけである。肝心の内容までは思い出せない。マルフォイが

バカ玉というの分からもない。

しかもネビルの場合あの玉すら何処かに忘れてくるのは目に見えていた。『思い出し玉思い出し玉』が必要かもしれない。いや、『思い出し玉思い出し玉思い出し玉』、『思い出し玉思い出し玉思い出し玉思い出し玉??』

「ここまで取りに來いよ、ポッター」

アレステットが下らないことを考えていると、ハリーを挑発しながらマルフォイが軽やかに宙を舞った。あの質の悪い箒をあそこまで乗りこなす辺り、大口を叩くだけのことはあつたようだ。今のアレステットには逆立ちしても箒であるの芸当はできそうになかった。

だが、それ以上に驚きだったのはハリーだ。マルフォイ以上の身のこなしで鋭く空を駆け抜け、彼の前に躍り出た。

その動きは、箒に関してほぼ同レベルと言えるアレステットとシルフィから見ても天賦の才を感じさせるのに十分なものだった。

果てには、マルフォイが放り投げた思い出し玉を追って凄まじい速度で急降下し、アクロバティックな動きで玉をキャッチして見せた。

グリフィンドール生からドツと歓声が沸く。スリザリン生達は何が起きたか分からない様子で口をパクパクとさせていた。

「ハリー・ポッター！」

が、歓声をあげていられたのも束の間。ドカドカと走ってきたマクゴナガルの鋭い声がグリフィンドールのお祝いムードを吹き飛ばした。

「まさか——こんなことはホグワーツで一度も??？」

ブツブツと独り言を呟いていたマクゴナガルはパチルやロンの弁明を一顧だにせずハリーを連れて城に向かって大股で去っていつてしまった。

鬼の副校長の姿が見えなくなると、マルフォイ達が耐えきれないとばかりに爆発したように笑い始めた。

「はは、そら、見た事か！ 英雄ポッター様もこれで退学だ！」

嘲笑を浮かべるスリザリン生に、グリフィンドール生達は揃って苦

虫を噛み潰したような表情を浮かべた。意外なことに、アイリーンも若干暗い顔をしている。

「ポッターは退学になると思いますか?」

「いや、それはないだろう。マクゴナガルはフーチの忠告を聞いていない筈だ。もし聞いていたとしたら、ポッターが飛ぶより先にマルフォイが捕まっていたら? なら、罰則目的で連れていったって訳じゃないと思う」

それに、例え彼女がなんと言おうとダンブルドアが確実に引き止めるだろうという確信もあった

「では、一体???」

「さあな。もしかしたらマクゴナガルが重度のクイディッチ狂いで、ポッターの筈の才能を見てグリフィンドールの代表選手にするために連れて行ったのかもしれない」

そんな冗談を飛ばすと、クスクスと楽しげにシルフィが笑った。自分で言っただがあまりにマクゴナガルのイメージからかけ離れた妄想に、アレステットも思わず吹き出してしまった。

その後の飛行訓練はグリフィンドール生達の落ち込みようは酷かったものの、滞りなく進行した。

因みにアレステットの筈はやはり全く言うことを聞いてくれなかったもので、こっそり魔法を使って空を飛んでいるように見せかけた。きつと見るものが見たら発狂する超絶技能であるが、誰も気づいた様子はない。

だが、それも慣れなもので、特に面白みもなかった。アレステットは早々に切り上げ、木陰の下で寝転がった。得意な呪文の一つである目くらまし呪文をかけ、全身を弛緩させる。

フーチは生徒のサボりに気づく気配はない。まだ初回の授業だし、一人いなくなっても分からないだろう。

空ではシルフィとアイリーンが何度目かもわからない競走を繰り広げていた。

しばらくぼーつとその様子を眺めていたが、この角度はマズイかもしれない、と今更ながら気がついた。高度がある上に逆光ではあるが、目が慣れてきたら『あれ』が見えてしまいそうだ。

そつと目を瞑る。

全身を擦ぐる気持ちのいい風に、アレステットは気づかないうちに意識を手放していた。

目を覚ますと、ひんやりとした空気に肌寒さを覚えて身震いをした。むくりと起き上がり、辺りを見渡す。

西の山間に美しい黄昏の帯が織られ、反対側には宝石のように輝く無数の星がそのヴェールをはだけさせていた。

「??しまった」

昨夜こつそり校内を『散歩』したツケが回ったのか。どうやら、かなり長い間寝入ってしまったようだ。

腰から懐中時計を取り出す。黒色のその時計はかなり年季が入っており、一見ただのガラクタのようにも見える。だが、アレステットにとってはある意味杖より価値のある時計だった。

時間的に、走ればギリギリ夕食にはありつけるだろう。

まあ最悪厨房にでもお邪魔すれば良い。

「??にしても、誰か起こしてくれてもよかつたんじゃ——あ」

身体にへばりつく妙な感覚に、やっと自分に目くらまし呪文をかけていたことを思い出した。

それは誰もアレステットに声をかけてこない筈だ。みんなからすれば突然姿を消したのだから。まさか芝生に同化して眠りこけているとは夢にも思うまい。

思わず、乾いた笑みが溢れた。なんとも情けないとは思うが、フレッドやジョージあたりはこの話をすればおおいに爆笑してくれることだろう。

(持ちネタが一つ増えたな)

呑気にそう考え、ホグワーツに向けて踵を返した、その時だった。

「————フォウリー！」

その瞬間、アレステットめがけて黒い何かが突っ込んできた。勢いよく振り返って咄嗟に杖をとろうとしたが、聞き馴染みのある声がある手止めた。

「ぐえっ」

黒い弾丸は勢いを落とすことなくアレステットの腹に突っ込んだ。

あまりの衝撃に、カエルが潰れたような間抜けな声が漏れた。

「フォウリーー！ フォウリーー！ どこへ行ってたんですか！ いえ、それより怪我はありませんか!?？」

シルフィだ。ペタペタとアレステットの安全を確認するように全身をまさぐり回し、頭の前からつま先まで異常がないか何度も視線を往復させた。

よくよく見てみると、シルフィの目元は泣き腫らしたかのように真っ赤だ。頬には涙の跡がくつきりと残っている。アレステットの身体検査の間にも、目尻に溜まった雫が新たに頬に線を引いた。

「えっと???!」

正直、アレステットには全く状況が理解できなかった。説明を求めるようにシルフィを見やるが、彼女はアレステットの胸に顔を押し付けたまま動かなくなってしまった。

まるで、離れたらどこかへ消えてしまおうと思っているかのようだ。

「シルフィは君を探しておったのじゃよ」

「ダンブルドア先生？」

シルフィの後ろから静かに歩いてきた校長の姿に、アレステットはますます混乱した。なぜ多忙な筈の彼がこんなところにいるのか。

「いやはや、心底驚いたものじゃ。夕食に向かおうと廊下を歩いたら、その子が泣きながわしに縋り付いてきたのじゃからのう。」

その子はこの、アレス。授業が終わってからもずっと君を探し続けておったのじゃよ」

衝撃的なその内容に、アレステットは思わず絶句する。

しゃくりをあげながら両手を背に回して強く抱きしめるシルフィを呆然とした表情で見つめる。その華奢な身体は、汗冷えですつかりと冷たくなっていた。

ギョツと唇を強く結ぶ。さつきまで呑気に眠りこけていた愚かな自分を殴り飛ばしてやりたい気分だった。

「す、すまない、コールフート。その、本当に、すまない??」

すっかりボサボサになってしまっていたシルフィの髪を撫で梳きながら何度も謝る。

その二人の様子を、キラキラと輝く青い瞳が優しげに見守っていた。

「良い友をもったな、アレス。察を超えた友情を評して、『今回は』減点は無しにしておこうかのう。」

さあ、二人とも。広間へ急ぐといい。夕食の時間もそろそろ終わってしまふのでな」

ダンブルドアは一言ことさら強調してそう言い残し、その年齢からは想像もつかないような確かな足取りで去って行った。

「その、コールフート、本当に悪かった。もうどこにも行かないから、少し離れてくれないか? 取り敢えず、夕食を食べに行こう」

「???」

「コールフート??」

「???すう??すう??」

泣き疲れたのか、シルフィはアレステットの胸の中で小さな寝息を立てていた。

その疲弊しきった姿に、また罪悪感が湧いてくる。肩を揺らすことも、目覚めの呪文を使うこともできそうになかった。

「おい、これ、どうすればいいんだ??」

結局、二人は夕食を食べ損ねた。

因みに、アレステットが事の顛末を語ると、あまりの怒気で殺傷力すら感じさせるよう冷え切った視線を向けられた。その日から夜間

外出を控えるようになったのは言うまでもない。

第7話 ハロウィーン

アレステットがホグワーツに入学してから既に二ヶ月が経った。アレステットは、杖を使う授業では凄まじい実力を発揮し、今や『ホグワーツ始まって以来の天才』などと持て囃されるほどまでその名を学校中に轟かせていた。

が、本人はむしろ賞賛や嫉妬の視線が苛立つのか、そう称されることを嫌がった。最近では上級生にも絡まれる始末。はつきり言って迷惑極まりないことこの上ない。75日待つか手を抜くか真剣に悩むほどだった。

しかし今日はそんな頭痛の種も忘れられそうだった。

本日、10月31日はハロウィーン。学校中に美味しそうなカボチャの香りが充満するという、ある種拷問のような環境でも授業は滞りなく遂行されていた。まあ、大抵の生徒が浮き足立って授業に身が入っていない様子ではあるけど。

「ウインガーデ diam・レヴィオーサー！」

アレステットは別にカボチャはそれほど好きではない。だが、恐らく普段より輪をかけて腕によりをかけた豪華な料理が出てくるかと思おうと口の中がすぐに涎で満たされた。

「ウインガーデ diam・レヴィオーサー！」

上級生の話によると、カボチャ料理以外にもビーフやポーク、チキンなどの肉厚なステーキも出るらしい。むしろそっちの方が楽しみであった。

「ウインガーデ diam・レヴィオーサー！」

(???そーいや、コールフートはカボチャが好物って言ってたっけ)

かなりの甘党であるシルフィは、カボチャも勿論大好きだった。特に、歓迎式の時に食べた糖蜜パイが大好物になったようで、朝から非常に上機嫌であった。

「ウインガーデ diam・レヴィオーサー！」

杖の先がアレステットの頬を掠めた。

「????」

いい加減無視できなくなってきた。

隣でぶんぶん杖をやたらめったら振り回す少女に視線を向ける。

机の上に置かれた羽根を睨みつけるようにして何度も呪文を唱えるが、羽はその効果を示さない。というか何故かさつきから爆発音を響かせてフリットウィックの頬を引き攣らせていた。

「どうなってるの!? 何で浮かかないのよ!」

癩癩を起こしたように金髪の少女が喚く。見るも無残に黒焦げになつた羽がフリットウィックの何度目かもわからない修復呪文で再生される。

アレステットは不幸なことに、この呪文学の授業でアイリーンと組まされた。

絡まれても面倒なので全力でスルーしていたが、涙目で杖を振りたくる姿を見ていると少々良心が痛んだ。

「なあ?」

「黙ってなさい!」

有無を言わさぬ迫力に思わず口を閉じる。

まあ、慣れないアドバイスをしたところで結局要領を得ないだろうから成功することもないだろう。それを理由に逆恨みされても面倒だ。

自分を納得させるようにつらつらと考え、ため息を吐く。辺りを見渡せば、どうやらみんなアイリーン同様に悪戦苦闘している様子だった。

が、そんな中でもやはりハーマイオニー・グレンジャーは優秀であつた。

「オーツ、よくできました! 皆さん、見てください。グレンジャーさんがやりました!」

ハーマイオニーが照れ臭そうに笑う。ただ、その隣ではロンがしかめっ面で不服そうな表情をしていた。

「くっ、なんでアイツが???ッ!」

アイリーンが焦つたように何度も何度も呪文を唱え、荒々しく杖を

振る。だが、そんな精神状態ではうまくいくものもうまくいかない。終ぞアイリーンが浮遊呪文を成功させることは無かった。

チャイムの音が響く中でも席を立とうともせず、焦燥に唇を強く噛んで俯く。その大海のような瞳は虚で、迷い子のように揺らめいている。

色んな授業でハーマイオニーがアイリーンよりも上手くいったとき、決まって彼女はこの表情を浮かべる。アレステットが褒められた時では決して見せない、沈んだ表情だ。

そして、アレステットが嫌いな表情だ。

率直に言って、アレステットはアイリーンのことを好ましく思っていない。純血主義で、マグル嫌いで、差別的で、高慢。親友のシルフィに悪口を言うことも理由の一つだ。

だが、その表情。自分の信じるものが折れてしまいそうな時の顔。いつかどこかで見たことのある苦悶。

それを前にした時、アレステットはどうしようもなく彼女を放っておけないのだ。

「シャフィック」

「何よ——ッ？？」

アイリーンに教科書を投げつける。本当はシルフィに渡すつもりだったが、まあ、もう一度作ればいいだけの話だ。

「何のつもり？ 教科書の読み込みが足りたかって言いたいわけ？」

どうやら、コケにされたと思ったようだ。今にも爆発しそうな怒りで肩をプルプルと震わせている。

「まあ、精々それを読んで練習することだな」

皮肉げに口の端を吊り上げ、教室を後にする。

ブチ切れて飛びがかかってくるかとも思ったが、相当凹んでいるらしく、力無くこちらを睨んでくるだけだった。

次の授業に向かう途中、肩に衝撃が走った。

ぶつかって来たのはハーマイオニーだった。結構な衝撃だったのだが、彼女はアレステットを一瞥することもなくそのまま彼女は走り

去って行ってしまった。

新手の嫌がらせかとも思ったが、横をすり抜ける際に宙を舞った雫と、背後に呆然と立つハリーとロンの姿を見て大体状況を察した。大方、デリカシーのない彼らが彼女を傷つけたのだろう。

その後、午後の授業でハーマイオニーの姿を見ることは無かった。

ハロウィーン。由来を辿れば元はケルトの収穫を祝う祭りだったようだが、現代社会ではもっぱらパーティーやお祭り騒ぎの口実にされるイベントに成り下がっている。

それはこの Hogwarts でも変わらないらしく、大広間はいつにもまして素晴らしい飾り付けがされていた。

「あ、アレステット、シルフィー。こつちだよおー」

ぶんぶんと手を振るハンナの下に苦笑を浮かべながら向かう。普段なら結構目立つ声量も、今は広間の喧騒にたちまち掻き消された。

「ね？ 言った通りでしょ？ 今日ならみんな気にしないと買ったんだー」

「ええ。本当にありがとうございます、アボット」

それは、昼休みのことだった。

いつものように二人で歓談をしていた時、ひよつこりとハンナが顔を出したのだ。久々に会った友達に挨拶を交わしたのも束の間、申し訳無さそうな顔をしたハンナがある提案をしてきた。

『ごめんねえ、シルフィー。ちよつとだけいいかなあ』

『？ いえ、勿論構いませんよ。どうしましたか？』

『二人はハロウィーンのディナーどうするの？』

どうするも何も、特に何も考えていなかった。二人は顔を見合わせ、困惑する。話が見えて来なかった。

『一緒にご飯食べないのお？』

『いえ、まあ、たしかにそう言われればそうしたいのは山々なのですが??』

今まで、二人で夕食をとったことは一度もない。シルフィは何度かグリフィンドールのテーブルに来ようとしたことがあるが、アレステットが制してきた。

夕食の時間は授業とは数の上で別次元だ。片方がもう片方の寮のテーブルに行くというのは、いわば敵の本拠地に丸腰で突っ込むのと同じだ。

アレステットとしてはスリザリンで浮いているシルフィをグリフィンドールからも敵視されるような状況にはしたくなかったのだ。アレステットもスリザリンのテーブルに来て席を共にするということもしない。グリフィンドール生を招いたスリザリン生となれば、シルフィへの嫌がらせが加速度的にエスカレートすることも目に見えていたからだ。

その旨を伝えると、ハンナがコクコクと頷いた。

『でもね、ハロウィーンのパーティーはすごい盛り上がるらしいんだよ。いつもより違う寮のテーブルでご飯を食べる生徒も多いんだってー』

『だから目立たない?』 ですが、それでもスリザリンはスリザリンで固まってるでしょうし??』

たしかに、ハロウィーンだからと言って悪目立ちするのは確実だろう。

『たしかに、グリフィンドールとかスリザリンのテーブルだと目立つかもねー。でも、ハップルパフのテーブルだとかかなあ?』

『???いいの?』

言わんとすることは分かった。だが、それでは今度はハンナに迷惑がかかってしまう。シルフィも眉を下げてハンナの顔色を伺う。

『勿論だよー。私、二人のこと応援してるもん。友達にも事情話したら協力してくれるって言ってたくれたんだあ』

ハンナはパンと手を叩き、自分のことのように嬉しそうに破顔した。

『??応援?』

『ちよ、アボット! だから違うと何度も??』

『分かってる、分かってる。じゃあ、夕食の時また会おうねえー』

まるで嵐のように去っていったハンナを二人して呆然と見つめる。心なしかシルフィの頬が熱を帯びていたが、アレステットは気づかなかった。

『どうしますか?』

『そうだな??。せっかくの厚意だし、お言葉に甘えようか?』

『こ、ここのここの好意!?!?』

『えっ?』

『あ、いえ、何でも??』

こうして二人はハップルパフのテーブルで夕食を頂く運びになった。彼女に迷惑をかけるのは忍びないので、こういった騒ぎに乗じれる時だけが。

ハンナの友人達——特に女子勢——は概ね好意的に二人を迎え入れてくれた。

「悪いな」

「そう思ってるなら来ないでくれるかい?」

約1名以外。

丁度正面に座るザカリアス・スミスという男子生徒はハップルパフらしくない性格をしているのか、まるでマルフォイのような表情でアレステットを鬱陶しそうにしている。

「スミス! ??すみません、彼も根はいい奴なのですが?」

「いや、気にしていないさ」

その横に座るジャスティン・フィンチⅡフレッチリーが申し訳なきように詫びた。実際、迷惑をかけているという自覚はあったので、アレステットは気にしていないと首を振った。

そんなやりとりなどどこ吹く風、いつになくハイテンションなシルフィがグイグイとアレステットの袖を引っ張った。

「フオウリー! ほら、見て下さい! こんなに大きな糖蜜パイは見

たことがありませんよ！」

「おお、本当だ。??え、いやデカすぎるだろ。まさか本当に一人で食べるつもりか？」

凄まじい速度で小柄なシルフィの胃に次々と甘菓子が詰め込まれていく。見ているだけで胸焼けしそうな光景に、思わず頬を引き攣らせた。普段は小食だというのに、甘いものは別腹のようだ。

「ほら、これもとても美味しいですよ！ フォウリーも一口どうぞです？」

「どれどれ?！」

差し出されたカボチャのケーキに舌鼓を打っていると、隣で（生暖かい目で）見守っていたハンナが眉を顰めた。

「二人はいつまでファミリーネームで呼びあつてるの?！」

「えっ」

二人して思わず顔を見合わせる。

アレステットもシルフィも、基本的にファーストネームで誰かの名を呼ぶことはない。ファーストネームを言ってくれる友人、例えばハンナ相手でもファミリーネーム呼びだ。

「いや、今更なあ?！」

長いことファミリーネームで呼びあつて来たからか、すっかりそつちで慣れてしまった。今頃になって呼び方を変えても違和感があるだろう。

だが、そう思ったのはアレステットだけだったらしい。

「??その、フォウリーが良いと言うなら、私は??！」

頬を染めてチラチラと伺うような視線を向けるその姿に、アレステットの鼓動が微かに高鳴る。

「あー??！」

何故かアレステットに圧力すら伴った視線が方々から突き刺さる。「えっと、じゃあ、シル——」

気恥ずかしい気持ちを押しさえ込みながら、口を開いたアレステット。

だが、それを遮るように大扉が勢いよく開かれた。

広間の生徒がみなそちらを向く。駆け込んで来たのは『闇の魔術に対する防衛術』の担当である、クイリナス・クイレル教授だ。

顔を恐怖で歪ませ、息も絶え絶えにダンブルドアの席にもたれかかる。

「大変です！ トロールが??地下室に??お伝えしなくてはと思つて??」

それだけ言うと、パタリと気を失い、倒れてしまった。

最初は困惑していた生徒たちのざわめきは徐々に大きくなり、大広間は大混乱に陥った。シルフィも不安げにアレステットに話しかけて来た。

「と、トロールとは???」

「マグルの世界で知られているのと大体同じだ。知力は低いが、その膂力と皮膚の厚さで並みの魔法使いなら圧倒するレベルの魔法生物だ」

しかし、それはあくまで一般的なレベルの魔法使いに限った話だ。ホグワーツの、しかも『闇の魔術に対する防衛術』に携わる教授であれば本来なら一捻りの筈である。

違和感を感じなくもないが、普段の授業でのクイレルのきよどりっぷりを思い出せば情けなくは思うものの納得してしまった。

「だ、大丈夫なんですか???」

「ああ、それは問題ないだろう。ダンブルドア先生がいる以上、この学校内で死人が出ることは無いさ」

安心させるように肩を叩くと、丁度ダンブルドアが監督生に生徒たちを寮へと引率するように言った。

「み、みんな！ お、おおおお落ち着いて！」

「アレは大丈夫でしようか？」

「あの人がまず落ち着くべきだろうな」

気弱そうな監督生が涙目でもりながらハッピーパフ生を引率する。見るに見兼ねたのか、アレステットたちより僅かに年上らしきハンサムな少年が代わりに生徒たちを纏め上げていた。

まさかこの流れに乗るわけにはいかないので、アレステットとシル

ファイはハンナ達に別れを告げ、こっそりとそこから抜け出した。

「??あれ、あの二人、どこへ行くつもりでしょう?」

二人の脇をすり抜け、ハリーとロンは人のいない廊下へと走り去った。

その焦ったような表情に、アレステットは二人の目的を大体察した。

そういえば、グリフィンドールのテーブルで今夜はいつもの喧嘩が見えなかったな、と。

「——コールフート、ちゃんと察に戻れよ」

「??えっ? ちょよ、フオウリー!?」

慌てたように叫ぶシルファイを背に、アレステットは目くらまし呪文と認識障害呪文を併用し、二人の後を追って駆け出した。

二人に追いついた頃には、既にトロールとの戦闘が始まってしまっていた。ロンがトロールの注意をハーマイオニーから引き剥がすように落ちてる物を投げつけていた。

なぜ地下にいたはずのトロールがこの女子トイレまで一直線に来たかは甚だ疑問ではあるが、今はそれを気にしている場合ではない。

ハリーがハーマイオニーを起こして逃げようとするが、彼女は突然のことに腰を抜かしてしまっている。トロールの意識はハーマイオニーからロンに移り、棍棒を振り上げんとしていた。

「プロテゴ、護れ!」

突如として目の前に現れた透明な盾に顔をぶつけ、トロールはふらふらとその巨体を揺らして後退した。

これならトロールを吹き飛ばしてもロン達に被害は出ない。

「フオウリー!?」

怒り狂ったトロールが、ハリー達の視線の先にいるアレステットを思いつきり睨みつける。おまえがやったのか、とでも言いたげな目

だ。

今度は標的をアレステットに変え、滅茶苦茶な足取りで棍棒を振り回しながらこちらに迫ってくる。

「ステューピファイ！」

だが、トロールの動きはあまりに遅い。アレステットの元に来るよりも早く、黒い杖から真紅の閃光が放たれた。

鮮血のように赤い光が唸りを上げながら直進し、トロールの胸を穿つ。着弾と同時に空気が圧されて衝撃波を撒き散らした。

トロールは勢いよく吹き飛び、地面で大きくバウンドして後ろに張られた魔法の壁に激突した。そのままうつ伏せに倒れ、ピクリとも動かなくなる。その巨体からはぶすぶすと焦げたような煙が吹き出していた。

本来の麻痺呪文の範疇を超える威力だ。普段は抑えている魔法力を自重せずに解き放ったが故である。その結果は正しく瞬殺と言うべきものであった。

「ふう??」

「フオウリー??何でここに??」

ハリーが困惑した表情で問いかけてくる。

ハリーとロンは、アレステットにいい感情を向けていない。理由はごく単純なことで、スリザリン生と仲良くしてるのを見て裏切り者だと思っっているから。おおよそのグリフィンドール生と同じである。

寮内でも話すことはない。それどころか、これ見よがしに陰口を叩くこともあった。アレステットとて、二人に嫌われているのは気づいている筈だ。

では、なぜ助けたのか。そんなことは言うまでもなかった。

「じゃあ逆に聞くが、なんでお前たちはグレンジャーを助けたんだ?」

今度はハーマイオニーも加えて3人は顔を見合わせた。

その時、ドタバタと忙しない足音が響いた。騒ぎを聞きつけて先生方がやってきたのだろう。ハリーとロンは誇らしそうに頬を緩めているが、アレステットとハーマイオニーは現状を正しく認識してい

た。

トイレに飛び込んできたのはマグゴナガル、スネイプ、クイレルだった。スネイプが静かにトロールの様子を観察するのに対し、クイレルは腰を抜かして身体を震わせた。

マグゴナガルは困惑したように倒れ臥すトロールと4人のグリフィンドール生の間で視線を彷徨わせた。

「一体全体貴方がたはどういうつもりなのですか」

青白い顔で震えるように唇を動かす姿からはハリーたちの想像していたような賞賛の色はない。

「殺されなかったのは運がよかった。寮にいるべきあなた方がどうしてここにいらっしゃるんですか？」

「それは——」

真実を告げれば、ハーマイオニーがなぜここにいたのか話さなければならぬ。それはハリーとロンが彼女に言ったことを話すということ。

アレステットにはなかなかうまく言い訳を思いつかなかった。

助け舟を出したのは、なんと当のハーマイオニーだった。

「マグゴナガル先生、聞いて下さい。三人は、私を探しにきたんです。私が、トロールを探しに来たんです。私??一人でやつつけられると思いましたが——あの、本で読んでトロールについて色んなことを知っていたので」

あまりの衝撃に、ロンが杖をからりと取り落とした。ハーマイオニーが、自分たちを庇うために先生に嘘をついているのだ。しかも、己を犠牲にしてまで。

「もし三人が私を見つけてくれなかったら、今頃死んでました。ハリーとロンがトロールの注意を引きつけてくれて、アレステットが魔法で倒してくれたんです」

ハーマイオニーのその配慮を無駄にはできない。三人はさもその通りですと言わんばかりの顔を取り繕った。

「はあ、ミス・グレンジャー、なんと愚かしいことを。たった一人で野生のトロールを捕まえようなんて、そんなことをどうして考えたので

すか？」

がくりと項垂れるハーマイオニー。その様子に思わずハリーとロンが口を出そうとしたが、アレステットが視線で制した。

「ミス・グレンジャー、貴女には失望しました。グリフィンドールから5点減点です。怪我ないならグリフィンドール塔に帰った方が良いでしょう」

トボトボとハーマイオニーが去っていく。その様子を見つめるマゴナガルの瞳にはしかし、彼女が言うほど失望の色があるようには見えなかった。先の厳しいセリフは愛の鞭、とでも言うものなのだろう。

「先ほども言いましたが、あなた達は運がよかった。しかし、大人の野生のトロールと対決できる一年生はそうざらにいません。一人5点ずつあげましょう。ダンブルドア先生に報告しておきます。帰ってよろしい」

そして何だかんだグリフィンドールには甘いだった。

スネイプが鬼の形相でこちらを見ていたのは言うまでもない。

前を歩くハリーとロンが何事かを話しているのをぼんやりと眺めつつ、アレステットは思考する。

(トロールはどこから入ってきたんだ？ ホグワーツの敷地内にトロールは生息していない筈だ。??ってことは)

誰かがトロールを招き入れた、ということだ。しかし一体誰が、何のために。動機は皆目検討もつかないが、状況的に騒動の犯人が内部犯なのはおそらく間違いないだろう。

「なあ、アレステット」

「ん、何だ？」

チラチラと視線を送っていたハリーとロンが立ち止まり、アレステットに向き合った。いつになく神妙な顔つきに疑問符を浮かべる。「その、僕たちキミのことを誤解してた。キミって意外といい奴なん

だな」

「意外とは失礼なことを。俺はもともといい奴だ」

ロンのむず痒くなるセリフに、茶化すようにして返す。照れ隠しだとも思っただのか、二人は顔を見合わせて小さく笑った。

談話室では、先ほどのパーティーの続きが行われていた。寮生たちは運び込まれてきた料理を食べ、思い思いに談笑を楽しんでいる。

「あ、アレステット、その???ありがとうね」

「気にするな」

入り口の側に立っていたハーマイオニーの感謝のセリフに後ろ手をあげて応え、テーブルの上に置いてあった糖蜜パイを口にする。久々の本気の魔法行使に熱くなっていた身体から力が抜けていく気がした。

それから、アレステットは時たま彼らと行動を共にするようになった。というよりも、アレステットが一人である時にトリオが彼の下にやってくるが増えた、と言うべきか。

別に友達が欲しくてあんな行動に出たわけではなかったが、シルフィという時に睨まれるようなこともなくなったのは都合が良かった。

しかしなぜか肝心のシルフィから少し当たりが強くなったのかについては永遠の謎であった。

第8話 決闘

授業も全て終わった放課後。

夕焼けの美しい茜の光が差し込む教室で、二人の少女が向き合っている。

片や、緑色のタイをした華奢な少女。

腰先まで伸ばされた黒髪は陽の光に反射して仄かな朱色を纏わせている。小さく上向きな鼻や唇とは裏腹にパツチリと大きな瞳は、まるで空模様を映したかのように暖かな緋色を灯していた。スラリと引き締まった長い足はため息が出るような脚線美を描いており、同年代と比べても明らかに小さい身長を補っている。その背の低さも、幼さを感じる顔立ちといい意味でマッチしており、小動物じみた可愛らしさを演出している。

もう一方は、赤色のタイをした背の高い少女。

先の少女とは趣の異なる整った容姿で、身体のパーツ一つ一つが派手な印象を受ける少女だ。眩いばかりの黄金の髪を赤色のリボンでツインテールに結び上げている。その一見幼さを感じさせる髪型に反して、顔立ちは彫りが深く端正に整っている。吊り上がった蒼海の瞳は生来の勝ち気な性格を如実に示していた。

黒髪の少女を可愛いと評するなら、こちらは綺麗と称えるのが正確だろう。

両者ともに非常に優れた容姿をもった少女たちだ。きつと後数年もすれば、周りの男が放っておかないような眉目秀麗な女性に成長することだろう。

だが、この光景を見ればきつと男たちは顔を引き攣らせて逃げ出さるだろう。鋭い眼光で火花を散らす二人の顔には、それだけの気迫と敵意に満ち満ちていた。というかアレステットもできれば眼をそらしたような光景だった。

「??カウントを3数えたら開始だ。準備はいいか?」

「はい」

「やつちとしなさいよ」

なぜこんなことになったのか。アレステットはここに至るまでの経緯を思い出していた。

いつもの待ち合わせ場所にやってくると、シルフィが奇行を取っていた。

その小さな体軀をライラックの生垣に隠し、コソコソと中の様子を伺っている。時折「ひゃー」やら「うわあ??」と感心するような、照れるような独り言を呟いている。

その姿は正しく不審者そのもの。

「??何してるんだ?」

「ひゃうっ!」

びくりと大きく肩を跳ねあげ、焦ったようにバツとこちらを振り向く。アレステットの姿を認めるとさらに狼狽の色を濃くした。挙動不審すぎる反応に思わず眼をパチクリとさせる。

「あ、アレステット??」

「入らないのか?」

「あ、ちよ、ちよっと待って下さい!」

横を通り過ぎようとするアレステットのロープをシルフィが慌てて掴み、制止した。訝しげに後ろを振り向くと、シルフィの視線が分かりやすく宙を泳いだ。

「えーっと、今日は別の場所にしませんか? た、たまにはいいでしょう? ここも勿論素敵な場所ですが、最近は少し寒いですし、校内とかで暖まりませんか?」

「いや、まあ、それは構わないけど?」

どうも様子がおかしい。まるでライラックの箱の中をアレステットに見せたく無いようで、視線を遮るようにして立ち、早くこの場から離れたいと言わんばかりに早口で急かす。

もしかして、またスリザリン生たちがやってきたのだろうか。アレステットの脳裏にあの日のことが蘇る。今思い返せば随分とつまらない??というか、臆病とも言える手段をとったことを彼は恥じていた。

義憤に駆られたアレステットは、シルフィの制止を振り切つてライラックで象られたアーチの中を覗いた。

そこでは、二人の男女がまぐわっていた。

「????????」

「あー、えーと??」
「うまくいつも通りに振る舞えない。口をついて出た意味のない言葉は、静謐な空気に呑まれてか細く消えてしまった。アレステットは困ったように頭をかいた。シルフィも所在なさげに手を彷徨わせている。」

遠目にクイディッチの試合に向けて練習するグリフィンボール生達が見える中庭をアテもなく歩く。沈黙は時間を増すごとに重みを増してきているような気がした。

そんな微妙な空気を打ち破ってくれたのは、アレステットの背中目掛けて勢いよく投げつけられた一冊の本だった。

振り向きざまに右手を振るい、飛来物を叩き落とす。煙を上げなが

ら廊下に落ちるそれは、随分と見覚えのあるものだった。

「??俺の教科書?」

「あら、手が滑ったわ。悪いわね、デート中に」

「??シャフィクか」

仁王立ちする金髪お嬢様の暴拳に眉を寄せるアレステットだが、それ以上に隣の少女がアイリーンに食ってかかった。

「何の用です? 友達のいないぼっちの貴女と違って、親友である私たちはこれから楽しくお話しする予定なのです。あ、ひよつとして私たちと友達になりたいのですか? 絶対にごめんですけど」

「そんなわけないでしょ! わたしもアンタみたいなマグルのちんちくりんなんて願ひ下げよ!」

「だつたら何をしにきたんです?」

冷たいシルフィの視線を憎々しげに睥睨し、アイリーンはどこからか取り出した手袋をシルフィの足元に投げつけた。

「今日は宣戦布告をしにきたの。入学式の日に言ったことを証明してあげるのよ。」

わたし、アイリーン・シャフィクはシルフィ・コールフートに決闘を申し込むわ!」

思わず目が点になる。あまりに突拍子のない挑戦状に、困惑しながらも脳内で無数の反対意見を浮かべる。

「ダメに決まっ——」

「望むところです。メツタメツタにしてあげましょう」

「おい?」

鼻息を荒げながら息巻くシルフィは、もうアレステットのことすら見えていないようだった。

「待て、他人への私的な敵意をもった魔法の使用は——」

「ふん、威勢だけはいいじゃない。時間は来週の金曜日の放課後、場所はいつもアンタ達が魔法の練習をしている教室。それでいいわね?」

「随分と余裕じゃないですか。もしかして負けた時の言い訳のつもりですか?」

「はあ? わたしは『慈悲』を家訓とするシャフィク家が次期当主。魔

法力の弱い憐れなマグル生まれのために1週間待つてあげると言ってるのよ。せめて杖の一振りでも倒れないように無駄な努力を積むことね」

小馬鹿にするような笑みを浮かべ、颯爽と立ち去るアイリーンの背を、親の仇のようにシルフィが睨みつける。まるで嵐のような一幕だった。勢いという意味でも、予期せぬ天災という意味でも。

「さして、コールフート」

「???」

「どうするつもりだ?」

「どうしましょう」

一転して不安げな顔で繼るように見てくるシルフィに、アレステットはため息を吐いた。

アレステットは、別にわざわざ決闘に付き合つてやる必要はない、と何度かシルフィに説得を試みたが、猛る少女は聞く耳を持つてくれなかった。親友のあまりの単純さと負けず嫌いに思わず目眩がした。しかし、そうならもう仕方がない。彼女が勝つためにサポートしてやるしか道はない。

翌日の放課後、例によってマクゴナガルから借りている教室でアレステットは個人レッスンを行なっていた。傍らには図書館で借りてきた攻撃呪文に関する本がいくつか積み重ねられている。

「いいか。今のまま戦つてもコールフートの勝ち目は薄い」

不満を押し殺した顔でシルフィが頷く。

少しでも練習の期間が確保できたのは僥倖だった。呪文学の授業に関して、シルフィはそれほど良い成績を誇っているとは言えない。対して、こと呪文学でのアイリーンの成績は(色々爆破させてはいるものの)目を見張るものがある。シルフィも変身術では好成績と言えるが、一年生レベルの変身術では戦闘には使えないだろう。

「と言っても、シャフィクがそれほど実戦的な攻撃呪文を使えるつて

わけじゃない。お得意の炎系の魔法も、ちよつと火傷する程度のレベルだろう」

「ですが、私にそれを防ぐ手立てはありません。自慢じゃありませんが、浮遊呪文もまだ一発じゃ成功できないんですよ？」

「盾の呪文にしる変身術での防御にしる、今は時間がなさすぎます。今回の戦法はただ一つ。相手より先に呪文を当てての瞬殺、それに限る。戦いが長引けば有利なのは確実に向こうだからな。だから、教える魔法も一つだ」

アレステットが杖を振るうと、一つの机が瞬く間にのつぺらな顔のマネキンへと変身し、続いて羽ペンが棒切れとなって人形の手に握られた。

「手本をするからしつかりと見ててくれ」

「はい」

一応決闘の作法に則って一礼し、杖を構える。しつかりとシルフィに見えるように杖先を真っ直ぐ人形の胸元に突きつける。

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

ゆつくりと、かつ聞き取りやすい発音とともに、黒い杖の先から鮮血のような光線が一直線に飛び出して白い胴体に直撃する。

シルフィが固唾を呑んで見守る中、マネキンの掌から木の棒が宙に飛び出し、二、三回ほど回転しながらアレステットの手に収まった。「派手な爆発でも、恐ろしい呪いでもない、地味ではあるが魔法使いにとっては必殺とも言える魔法——武装解除呪文。決闘においては基礎中の基礎とも言える魔法だ」

「杖を奪う??なるほど、たしかに、それは确实ですね」

アイリーンが杖を奪われて狼狽する姿を想像したのか、シルフィは愉悦に顔を歪めた。

「ただ、この呪文は本来来年以降習うらしい。だから、1週間で覚えるのは至難の技だと思うが??」

「やってみせます」

どうやらやる気は十分のようだ。瞳の中でメラメラと燃え上がる闘志に呼応するように、彼女の手の内のクマシデの杖もその存在感を

アピールしているような気もする。これだけの熱意があれば、きつと杖の方も答えてくれるだろう。

「よし、じゃあまずは理論の方を理解しなければいけない。つまり、書き取り。羊皮紙と羽ペンを出してれ」

「??えー??」

その日から、二人の対アイリーン魔法訓練が始まった。

回想終了。

とはいえ、やはり何度思い返してみてもなぜアイリーンがこんな決闘を挑んできたのかについては謎だった。

単にシルファイが気に食わなかったと言えはそれまでだが、どうも違和感を感じる。それだったら別に同じくマグル生まれのハーマイオニーでも良かった筈だ。喧嘩してる回数だけ言えばあちらの方が多いのだし。

今のアレステットではいくら考えてみても答えは出そうになかった。それに、今は呑気に思考に耽っていられるような時間はない。

小さく二人がお辞儀したのを見計らい、右手を高くあげる。

「3」

両者ともに奇を銜うことなく杖の照準を真っ直ぐに相手の胸へ向けている。どうやら戦略は向こうも同じようだ。

「2」

アイリーンの使う呪文に関しては検討もつかないが、彼女も魔法の修練を積んできたのは間違いない。この1週間、毎朝彼女の元にはフクロウ便で手紙が届いていた。おそらくは両親に魔法について教えを請うていたのだろう。

一筋縄ではいかないのは間違いない。

「1」

だが、シルファイも負けてはいない。彼女のこの1週間の努力は、アレステットが一番よく知っている。少なくとも、寮に帰る度に談話室

で優雅に紅茶を飲んでいたアイリーンよりも頑張っていたのは疑いようもない。

「0!」

「フリペ——」

「エクスペリアームス!武器よ去れ!」

ゆえに、この結果は必然とも言える。

何十回と練習し、それこそ身体に染みこむまで繰り返したその動きは、明らかにアイリーンのそれを上回っていた。アイリーンが呪文を唱え終わる前に、シルフィの杖から放たれた赤色の光線がアイリーンの胸に直撃した。

驚愕に顔を引き攣らせながら後退するアイリーンに、勝利を確信したシルフィが顔を綻ばす。

「やった——ッ!?」
だが。

今度は、シルフィの顔から血の気が失せる番だった。

アイリーンの手には、未だにその豪華な装飾のなされた杖が握られていたのだ。

(失敗か?!)

やはり時間が無かった為に、シルフィの武装解除呪文の成功率は100%とは言い難い。それにさらに決闘という大きなプレッシャーがかかれば、当然確率も格段に落ちる。

その結果はご覧の通り。シルフィの魔法は、閃光こそ放ったものの本来の効果を示さなかった。

呪文が当たった事で気を抜いてしまったためか、シルフィの動きは緩慢だ。対して、余裕の笑みを掻き消して反撃に転ずるアイリーンの動きは素早い。

「フリペンド、撃て!」

「——ッ!」

衝撃呪文によって勢いよく突っ込んでくる机を、大きい身体を傾かせて間一髪のところまで避ける。

けたたましい音を立てて頭の横を跳ねる大質量の物体にシルフィ

の顔に焦りが浮かんだ。

「インフラマレーイ！」

ここぞとばかりにアイリーンが畳み掛ける。リンドウ色の火の玉が、シルファイ目掛けて勢いよく撃ち出された。

反撃の隙を与えないように次から次へと放たれる火の玉を、咄嗟に倒れた机を盾にすることでどうにかやり過ごす。この時ばかりは自分の小柄な身体に助けられた。紫炎の弾丸の直撃と同時に、僅かばかりの熱気と衝撃がシルファイの頬を撫でた。

「ふん、小癩ね！ インフラマレーイ！ 燃えよ！」

だが、突進しながら火の玉をまるで機関銃のように連射するアイリーン相手に、その薄い木の板程度ではあまりにも心許ない。高速で叩きつけられる無数の火の玉に、机はすぐさま悲鳴をあげてバキバキと嫌な音を立て出した。

「くっ——ッ」

ついに煙を上げ、パチパチと音を立て始めた机の影から転がるように離れる。視界の端でローブの裾が僅かに焦げているのが見えた。

「フリペンド、撃て！」

だが、それを狙っていたのか、正確にシルファイ目掛けて衝撃呪文の閃光を放たれた。目では追える程度の速度の光線を、我武者羅に地面を転がる事で、すんでのとところで躲す。

「くっ??:エクスペリアームス！」

グラグラと揺れる視界。次弾が迫る前に、再度武装解除呪文を放つ。しかし、その不安定な体勢から放たれた苦し紛れの一撃が当たらずもなく、見当違いな方向を直進して教室の壁に虚しく吸い込まれた。

遂に晒した、あまりにも致命的な隙。体勢は崩れ、杖はあらゆる方向を向いている。そのチャンスのみすみす見逃すほどアイリーンもバカではない。

杖の先がピタリとシルファイの鼻先を捉えた。

まるで、景色がスローモーションで動いているように見えた。決して極限状態における思考の加速ではなく、処理落ちによる認識の遅延

によるものだ。来たる衝撃に備えて眼を固く瞑り、奥歯を噛み締める。

「インフラマーレイ!!?」

——だが、アイリーンの魔法もまた、シルフィの身体から大きくズレた位置に着弾した。明らかに停止している物的そのものを外したのだ。

舐められているのか。

シルフィは激情のままに杖を向ける。そこで初めて、彼女の異変に気づいた。

「くっ——!!?」

(魔法の使いすぎか??)

先ほどの魔法の連続行使は、明らかに一年生の範疇を超えていた。その代償として、アイリーンは魔力の過剰使用によりこのごく短時間では考えられないほど疲弊してしまったのだ。

苦しそうに顔を歪ませ、肩で荒々しく息をする彼女には、もはや魔法をまともに当てるだけの精神力も魔法を躲すだけの体力も残されてはいなかった。

「エクスペリアームス!」

今度こそ、リンボクの杖が宙を舞った。

気を失ったアイリーンを医務室に送り届け、夕食の席へと向かう。シルフィも彼女ほどではないが相当消耗しているのか、勝利の愉悦に浸ることもなく、ふらふらと覚束ない足取りで隣を歩いていた。

「お疲れ、コールフート。それと、おめでとう」

心からの賛辞だった。虚をつかれたようにこちらを向くシルフィだったが、すぐに疲れを感じさせない満面の笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。??そういえば、フォウリー」

「なんだ?」

「これだけ頑張ったのですから、何かご褒美があってもいいとは思

「ませんか？」

なるほど、たしかに。

この1週間、来る日も来る日も何時間もかけて彼女は練習を積んできた。しかも、きつと寮に戻った後も自主練習を重ねていたとアレステットは推測していた。その結果、彼女は魔法の世界で育った生粋の魔法族に打ち勝ってみせた。

彼女の言う通り、何か報酬があつて然るべきだろう。

「そうだな、何か欲しいものでもあるか？　うちの家系はそれなりに資産家でな、それなりのものを用意できると思うぞ」

聖28一族の大体の例に漏れず、フォウリー家は非常に裕福だ。アレステットがこれまでの生涯で使ってきたガリオンすら総資産のうちでは本当に微々たるものだ。それに、イギリスに限らずヨーロッパ中に広く持っている土地の貸付で、毎年目が飛び出るほどの資金が舞い込んでくる。

シルファイが想像できる程度のものであれば軽く用意できるだけの自信があつた。

「??欲しいものはあります。ですが、私が欲しいのは高価な物じゃありません」

「ん、そうなのか。なんだ？」

「??シルファイ」

「え？」

「これからは、私のことをシルファイって、名前で呼んでください」

それは、いつかのハロウィーンのパーティーで話したこと。あの時はトロールの乱入によつて話が流れてしまつて、アレステットも今の今まで忘れていた。

「??それだけでいいのか？」

拍子抜けしながら問う。しかし、シルファイは至極真剣な表情でじつところちらを見つめながらしつかりと頷いた。

「??わかったよ、シルファイ。これでいいか？」

「！　ええ、アレステット！　これかも、よろしくお願いしますね！」
踊るように軽やかなステップでアレステットの前に回り込み、花が

咲くようににっこりと笑いかける。そのあまりに眩しい笑みに、アレステットの頬も緩む。

本格的な冬を前に構内は既に寒々しい冷気を漂わせている。だが、二人の間にはまるで春の陽気な風を思わせるような穏やかな空気が流れていた。

第9話 敗北

幼き日の記憶が蘇る。まだ幼き少女が無垢で差別的な思想に染まっていなかった頃の、ある日の話だ。

6歳になつたばかりのアイリーン・シャファイは、不揃いに結われたツインテールの髪を揺らしながら書齋に突撃した。周りには自分よりも大きな本棚がまるで林のように立ち並んでいる。

彼女の右手には幼女には不釣り合いな大きい本が抱えられていた。

アイリーンはキョロキョロと辺りを見回しデスクの上で作業をしてるパパの姿を認識すると、パタパタと駆け寄った。愛らしき極まる娘の姿に、彼女の父親はだらしなく頬を緩ませた。

「おはよう、おとーさまー!」

「ああ、おはよう、アイリーン。何かわからない言葉でもあったのかな?」

マルフォイ家が主催するようなパーティーの度に、マダムたちを蕩けさせるダンディな顔つきからは想像もつかないような猫撫で声だ。まさに親バカここに極まるとでも言うべきだろう。

「ええ、この本のことなの!」

アイリーンは小さな手を限界まで伸ばして分厚い本を父の前に差し出した。

「どれ??『穢れた血と近世以降の魔法界の衰退』か。まだアイリーンには少し早いんじゃないのかな?」

少しページを捲ると、非常に専門的な単語や論文からの引用で溢れていた。彼にとっては愛読書の一つであるが、アルファベットを理解したばかりのこの少女にはただの文字の羅列くらいにしか認識できない代物だろう。

勿論幼きアイリーンはこの本の内容については一部たりとも理解できなかった。彼女が疑問に思ったのはタイトルについてだ。

『けがれたち』ってなんのこと?」

『穢れた血』というのは???まあ、マグルたちのことだ。僕達とは違う、憐れな下等生物達だよ」

「なんでマグルが『けがれたち』なの？」

こてんと可愛らしく首を傾げる姿はどこまでも純真で無垢だ。無知であるがゆえに、その思考はまるで真っ白いキャンバスのようだ。

そして、それを恣意的に染めるのはいつだって偏見と凝り固まった固定観念に縛られた大人だ。

「マグルの者たちは僕達魔法族と違って魔法が使えないだろうか？」

「だけど、マグルの中には魔法を使える人もいるってデイクが言っていたわ」

父親の顔が露骨に歪んだ。思考の片隅で娘に余計な知識をつけた家庭教師を解雇しようと決意しながら、忌々しそうに口を開く。

「??たしかに、そうだね。腹立たしい事に、彼らの中でも突然変異で魔法を使える者が出てくることはある」

「じゃあ——」

「だけど、それは本当に一握りで、大多数は魔法を使えず、その神秘の一端も知ることにはない愚かな生き物なんだ。一人で火を起こすこともできやしないし、空も飛ばない」

父親が冷たい嘲笑を浮かべる。その笑みの意味することはわからなかったが、アイリーンも做うように顔を綻ばせた。彼の思想に同調したわけではない。ただ、父が喜んでいるならそれはきつといい事なのだろうと判断したまでのこと。その積み重ねが何を齎すのか、無知な彼女が知るわけもなかった。

「じゃあ、その魔法が使えるマグルたちは選ばれた人たちってことね！」

「それは違う」

これまで以上に強い口調に、アイリーンは思わず肩を震わせる。父が向けてくる視線は、未だ嘗て経験のないほど冷たく、怒りを孕んだものだった。何か失言したのか、と感じたアイリーンの顔がみるみるうちに青くなる。

その様子に気づいたのか、父はすぐに取り繕うような柔和な笑みを浮かべてアイリーンの頭を撫でた。

「彼らこそ、真に淘汰されるべき存在なのだ。いいかい？ マグル生

まれの魔法使いというのは我々よりも遥かに劣った存在だ。そのことは、偉大なる純血の王にしてホグワーツの祖でもあるサラザール・スリザリンが認めている通りだ」

「おとつているの？」

「ああ、そうだ。この本をあげよう。まだ僕は仕事が残っているからね、お母様に朗読してもらいなさい」

父から手渡された本はこの書齋にある大凡の例に漏れず、分厚く難解そうだ。背表紙にはブルータス・マルフォイを始めとした著名な純血主義の権力者や研究者が著者に名を連ねていた。

父からのプレゼント。

アイリーンは嬉しげにツインテールの先を揺らして本を胸に抱いた。

「ありがとう！ おとーさまー！」

嬉しそうに母の元へと駆け出していくアイリーンの姿に、父は満足げに啜う。

彼は心の底から信じていたのだ。純血主義を信奉することこそ正しき在り方であり、それを伝えることこそ純血の家に生まれた親としての責務なのだ。

両親による英才教育の成果か、アイリーンはシャフィク家の名に恥じない「立派な」レディに育っていた。キングス・クロス駅ですれ違うマグルたちをまるで汚物のように見る娘の姿に、両親は満足そうに微笑んだ。

マグル製の蒸気機関車を不快そうに眺めるアイリーンを母が抱きしめて背中を撫でる。

「何か相談事があったら、母に手紙を送りなさい。緊急を要するようだったら、寮監のセブルスを頼るといいでしょう。貴女もパーティーで会ったことがあるでしょう？ 彼は私たちの仲間よ、きっと力になってくれるわ」

「はい、お母様」

二人とも、アイリーンがスリザリン以外の寮へ行くとはカケラほども思っていない。彼女たちは数時間後に彼女を襲う「悲劇」など予想だにしていなかった。

できうる限り愛する一人娘との最後の抱擁を堪能したいのだろう。苦しそうなアイリーンに構わずに抱きしめる妻の姿に父親は苦笑を漏らした。

「アイリーン、ドラコ君とはちゃんと仲良くするんだよ」

「???わかってるわ、お父様」

聖28一族の中でも最も強い権力と莫大な資産を持ち、現存する純血の家系の中でリーダー的存在と目されているのがマルフォイ家だ。

その一人息子であるドラコ・マルフォイとは、パーティーの度に顔を合わせる間柄だった。というより、父はアイリーンとドラコが将来的に『特別な仲』になるのを期待してる節があるようで、事あるごとに二人だけで遊ばせるように仕向けていた。

だが、アイリーン自身はドラコのことを好いていなかった。父の手前表だって行動に移すことはないが、根が小心者で小狡いドラコは寧ろ嫌いなタイプですらあった。一方のドラコもアイリーンの高圧的な態度とわがまま気質に気圧され、プライドが傷つけられるのが嫌なのか、彼女のことを苦手としているようだった。

両親の思惑に反して、二人は致命的に相性が悪いと言わざるを得ない。

だが、父に嫌われたくない一心で全気力を振り絞ってアイリーンは首を縦に振った。

ホッと安心するように笑い、父も母とアイリーンを両方包み込むようにして抱きしめた。

「??ああ、それと、もしもフォウリー家の子供がいたら、適度な距離で付き合いなさい。特別親しくする必要はないが、彼のことでは何か気づいたことがあったら逐一僕にフクロウ便を飛ばしてくれ」

よくわからない要求に、思わず瞠目する。フォウリー家は聖28一族の一つだ。その子供と仲良くしろ、というのは理解できるが、どこか言い聞かせるような父の目に宿る真剣さからそれだけではないと

察せられた。

理由を問おうとしたアイリーンだが、父は曖昧に笑い、最後にもう一度強くアイリーンの身体を抱きしめると、身体を離してしまった。「――さあ、ホグワーツには多くの楽しみと未知の冒険が待っている。何も寂しがる必要はない。スリザリンでは間違いなく無二の親友や大切な人ができるのだからね」

父の激励に胸を高鳴らせる。両親との別れは確かに悲しいものだったが、ホグワーツでの生活に想いを馳せれば涙は出なかった。寧ろそんなカッコいいことを言っている父こそ、眦がキラリと輝いていた。

「行つてます、お父様、お母様」

遂には二人してすすり泣き始めた両親の精一杯の笑顔に見送られながら、アイリーンはホグワーツへと向かった。彼女の瞳は夢にまで見た学校生活への期待で輝いていた。

ホグワーツ入学してから2ヶ月ほどが経過した。

アイリーンの学校生活は端的に言つて最悪だった。

それは入学初日から始まった。何をトチ狂ったのか、帽子はアイリーンをグリフィンボールに組み分けしたのだ。

スリザリン以外の寮に行くなど微塵も想定していなかった為に、その衝撃は凄まじいもので、豪勢なダイナーも満足に味わうこともできなかった。

スリザリンに行くこと確信しているゆえに帽子に一任していたのが悪かったのかもしれない。アイリーンはひどく後悔し、やり直しを何度も希望したがマクゴナガルには取り合ってもらえなかった。

帽子は間違いなく判断を間違えた。それをアイリーンは確信していたし、彼女を知る者は皆同感だった。

実際、彼女はグリフィンボールで相当浮いていた。腫れ物のように

扱われているとも言える。親マグル派のゴドリック・グリフィンドルを祖とする上にスリザリンへの敵対心から、グリフィンドルでマグル生まれや混血を差別することはタブーとされている。そんな中で平然とマグル生まれや混血、果てはウィーズリーののような純血でも血を裏切る者と罵るアイリオンはすぐに孤立し、嫌われクイーン（双子のウィーズリー命名）などと呼ばれるようになった。

何か陰口を叩かれれば真正面から狂犬の如く噛み付くため、イジメられることこそないが、代わりに誰にも話しかけられることもなかった。

パーティーなどで表面上の友好関係を築いてきた同学年の純血の顔見知り達はみな当然のようにスリザリン寮だ。グリフィンドルに組み分けされたアイリオンへの接し方に戸惑っているのか、それなりに面識のあるダフネやミリセントたちとも疎遠になってしまった。

唯一の救いは、嫌われるかもしれないと戦々恐々としていた両親から毎日のように励ましと慰めの手紙が送られてくることだろうか。既にアイリオンはクリスマス休暇が待ち遠しくて仕方がなかった。それもマルフォイ家のパーティーで大半が潰れるかと考えると憂鬱でもあったが。

だが、何よりも辛かったのが授業に関することだ。

ハーマイオニー・グレンジャー。彼女は純然たるマグル生まれで、身なりも小汚い典型的な『穢れた血』だった。

だというのに、授業の度に嫌という程見せつけられる差。勉学に関することだけではない。杖を使う授業で、彼女は飛び抜けた成績と能力を示した。

ハーマイオニーが容易く羽を宙を浮かす一方で、アイリオンはとうとうと羽を黒焦げにすることしかできない。

では、他の純血の者達はどうだ。アイリオンと同じく聖28一族であるウィーズリー家のロンも、ロングボトム家のネビルもハーマイオニーが出した結果には遠く及ばない。ドラコやミリセントたちにいたっては、そんな彼らにすら遅れているというではない。

その度に、『才能』という言葉が脳裏をチラつくのだ。それはアイリーンがこれまで築き上げてきた価値観や観念を揺さぶるものだった。

——ハーマイオニー・グレンジャーが特殊なんだ。

アイリーンは、自分にとつて決定的な何かを打ち崩すような彼女の存在に恐怖しながら、次第にそう考えるようになった。

そう、彼女はマグル生まれの中でも異端。母数が母数だけに、一人くらいはそういう者が出てくることもあるだろう。

何かから目を逸らすようにそう考えないと、アイリーンは平静を保てそうになかった。

しかし、そんな考えもすぐに破綻した。

すっかり陽が落ちるのも早くなり、まだ夕食の時間までしばらくあるというのに薄暗くなった校舎をアイリーンは不機嫌そうに歩いていた。

その右手には一冊の教科書が握られている。彼女のものではない。ハロウィーンの日隣に座っていたアレステット・フォウリーに投げ渡された本だ。

その時は「教科書の読解が足りてないんじゃないのか？」と遠回しに皮肉られたと勘違いし、怒りに打ち震えたものだが、中身を読んで心底驚いた。

教科書の中で難しい内容のところに付けられた注釈や、まるで教科書の間違いを訂正するように付け加えられた文。アイリーンが半信半疑ながら書いてある通りに魔法を使ってみると、これまでよりもはるかに手応えのある結果が出た。

何かと皮肉を言ってくる腹立たしいあの男のお陰、というのは少々癪ではあったが、呪文学の成績が僅かに上向いたのも事実。なぜ自分を嫌っているであろう彼がこんなものを貸してくれたのかは全く分からなかったが、アイリーンは一シツクルほどの感謝を抱いていた。

しかし、いつまでもこの教科書を借りているわけにもいかない。前回の呪文学では当たり前のように教科書を持っていたが、恐らくは先

生に借りたか図書館で借りてきたのだろう。このままだと借りパクの汚名を着せられるかもしれない。それはシャフィク家次期当主としてありえないことだった。

実は複製呪文を使った為、アレステットは実質ほぼノーコストなのだ、それはアイリーンが知る由も無い。

そこで翌日に呪文学を控えたその日に教科書を返そうと思ったのだが、談話室で待つていても帰ってくる様子が無いので、仕方なくこうして自分から足を運んでいるのだ。夕食後まで待てば良いのだが、彼女は悲しいことに短気で浅慮だった。

だが、この学校は見た目以上に広く複雑だ。しかも学校全体がまるで一つの生き物のように嫌がらせをしてくる。

無計画に探し始めたアイリーンはすぐに後悔した。しかし、ここでUターンして談話室で待つのもなんだか負けたような気がするし、あそこはアイリーンにとって決して居心地のいい場所では無い。

その結果、小一時間近く血眼で構内を探し回る羽目になったアイリーンは既にアレステットへの理不尽な怒りで爆発寸前だった。

やっとの事で——なぜか閑散とした教室に立つ——アレステットを見つけた時は、その爆発を現実のものとして教室内に炸裂しそうになった。

それを押しとどめたのは、教室にアレステット以外の人影を視認したからだ。

思わずドアの影に隠れて息を潜め、そろりと顔だけを出して中の様子を観察する。

——そこでは、目を疑うような光景が繰り広げられていた。

「ルーモス、光よ」

「ノックス、闇よ」

それは、アイリーンにもまだ使えない魔法。最近授業で扱ったばかりのもので、アレステットから借りた教科書を参考にしてもなかなかうまくいかなかった魔法と、さらにはその反対呪文。

それをしていたのがアレステットだったなら、きつと驚くことはなかっただろう。

だが、辿々しいながらもその呪文をキツチリと成功させていたのは彼ではなく癖のない真っ赤みがかった黒髪を腰まで伸ばした小柄な少女——シルフィ・コールフートだった。

彼女もハーマイオニーと同じだ。ホグワーツから手紙が来るまで魔法のまの字も知らなかったような、生粋のマグル生まれ。その癖して、アイリーンがどれだけ願ってももう手が届かない名誉あるスリザリンに組み分けされた忌々しき少女。

しかし、ハーマイオニーほど嫌っているわけではなかった。事あるごとに自分に反論してくるのはたしかに腹立たしかったが、ハーマイオニーのように魔法の才でアイリーンの心をかき乱すことはない。つまるところ、安心して見下すことができた。

だが、それもはや過去の話。

アイリーンの前で自在に魔法を操るシルフィに、アイリーンの顔から血の気が失せる。心臓は早鐘を打ち、今までにないくらい胸が騒ぎだした。

ハーマイオニー・グレンジャーもシルフィ・コールフートも特別ではないのかもしれない。

では、なぜアイリーン・シャフィクは彼女達に遅れを取っているのか。

深く思考する必要もなく、目を背けたくなるような結論が自然と浮かび上がる。

——それを認めることなど到底できなかった。

ゆえに、アイリーン・シャフィクはシルフィ・コールフートに決闘を挑んだ。純血こそが真に優れた存在であるということを証明する為。

「んっ?」

意識が浮上する。なんだか長い夢を見ていたような気がした。目蓋を貫通するチカチカとした光に身じろぎをする。

全身を包み込む柔らかな感触に覚醒しかけて思考がまた融けそう

になるが、微かに香る薬草の匂いと遠くから聞こえる話し声に徐々に目が覚めてきた。

「——つまり、貴方のミスが原因だと?」

「はい、俺の不覚の致すところですよ。浮遊呪文の制御を失敗したばかりに、誤って彼女を昏倒させてしまいました」

「グレンジャーといい、貴方といい、まったく?」。グリフィンドールに5点減点。シャフィクが目を覚ましたら、彼女にも事情を聞きますからね。もし先ほどの説明が嘘だった場合は貴方がこれまで稼いできた得点が全て無くなると思いませんかい。私は戻りますが、貴方も出来るだけ早く寮に戻りなさい。それでは」

コツコツと床を叩く音が遠ざかる。

それと同時に、音を立ててカーテンが開き、アレステットが入ってきた。半目で睨むアイリーンに気づいたのか、驚いたように眉を上げた。

「起きてたのか」

「??ここは?」

「医務室だ」

「はあ?。なんでわたしがこんなところに——って、そうか?」

ズキンと刺すような頭痛とともに、気を失う前のシーンが脳裏に映し出された。シルフィの杖から真っ直ぐに伸びる赤い光が自分の胸を穿ち、杖を奪い取られる光景だ。

完敗だった。

恐らく本当は最初の一撃が当たった時点で、アイリーンは何もす事もできずに負けていた筈なのだ。しかも運良く初撃を相手が失敗してくれたというのに、その後の攻撃で攻め落とせず、挙句には消耗して身動きを取れないところを一発。

「負けたのね、わたし?。何よ、わざわざ嫌味でも言いに来たの?」

「いや、たしかに大口叩いた割にはあつさり負けたなとは思いますが、別にそれを言いに来たわけじゃない」

「充分言ってるわよ!」

アレステットは懐から何かを取り出してアイリーンに手渡した。

白い手袋だ。

「??なによこれ」

「いや、お前のだろ」

よく見れば、丁度1週間前にシルフィへの果たし状として投げた手袋だった。別に高価な物でもないし、なんなら今の今までこの存在すら忘れていた。

「???まさか、これを渡すためだけに来たの?」

時計を見やれば、あの決闘から数時間が経過していた。もし彼があの後ここまで運んだくれたとしたら、こんな物を渡すためだけにもう一度医務室までやって来たということになる。

「それこそまさか。マクゴナガルに事情を説明するついでだよ」

ふうんと、領きながら何の気なしに手袋を手の中で転がす。すると、地面に放ったにも関わらず真っ白なままであることに気がついた。魔法で清めたのだろうか。変なところでマメな男である。

マクゴナガル。

そうだ、さっきの話し声はアレステットとマクゴナガルの声だった。

「???なんで、わたしを庇ったのよ」

「なんのことだ?」

「白々しいわよ。わたしが気絶したのを自分のせいにしてたじゃない。自己犠牲のつもり? 言っておくけど、全然かつこ良くないわ。頼んでもないし、余計なお世話よ」

「別にお前を助けたなんて思っていない。決闘のことを話せば、グリフィンドールから引かれる点数は5点じゃ済まないだろう。それに、シルフィにも迷惑がかかることになるからな」

本音は最後の部分だろう。彼が誰よりもシルフィのことを大事に思っているのは周知の事実だ。きっと寮の得点なんて毛ほども気にしていないだろう。

これ以上話すことはない、とアレステットが踵を返した。その背を睨みながら、ポツリと呟く。

「???わたしは、負けてないわ」

「??なに?」

「わたしは、アンタに負けたのよ。優れた純血のアンタが、あの女に魔法を教えて上達したから、わたしに勝った。アンタが何もしなかったら、アイツは手も足も出なかった筈よ」

それはきつと事実だ。シルファイが一人練習したところで、才能や知識の面でアイリーンが上回っていたのは明らかで、アレステットもシルファイ自身も認識していた。だからこそシルファイはアレステットを頼り、彼は教鞭をとったのだから。

アレステットに借りた教科書のことを思い出す。読むだけでアイリーンの魔法の腕が上達したのだ。直々にその薫陶を受けたシルファイが自分よりも上を行くというのも納得できる。

そうして、自分に言い聞かせようとした。

「そうか、それは残念だったな。俺は純血じゃない」
「??え?」

身体をこちらに向き直し、視線がぶつかる。何かを抑え込むようなその強い意志の宿った瞳に自然と目が吸い寄せられた。

「生物学上の俺の父親は混血だった。だから、俺はお前のように純血じゃない。??まあ、今はそんなことどうでもいい。

本当はお前だって分かっているんじゃないか? アイリーン・シヤフィク。お前が負けたのは、俺がシルファイを成長させたからじゃない。お前よりも彼女の方が努力したからだ」

「ど、りよく??。は、はは??。そう、努力なんてしないと、才能の差を埋められないのね。やっぱりマグル生まれは——」

「お前だって、努力してたじゃないか」

ひゅつと喉が鳴った。呼吸が乱れる。それはナイフのように鋭い一言だった。

聞きたくない。耳を傾けるな。

そう本能が自己防衛のために訴えかけてきても、アイリーンはアレステットの黄金のように輝く瞳から目を離せなかった。

「これ見よがしに談話室で紅茶なんて飲みやがって。今までしたこと

もない癖に」

——皆が寝静まった寝室で、布団を被りながら高学年用の教科書に噛り付いた。放課後、誰も来ないような寒い森の中で何度も杖を振るった。

冷たい視線に晒されながら談話室で好きでもない紅茶を啜った。自分は才能だけで勝つのだ、努力なんてしていないのだと見せつけるように。

それがアレステットへ示すためのものだったのか、自分自身を騙していたのかは分からなかった。

「純血も、マグル生まれも結局差なんて殆どありはしない。そこからどうなるのかは、そいつ次第なんだよ。本当は気付いていたんだろう？ 一体何をそんなに怖がってるんだ？」

「わたしが、怖がっている???!」

まるで全てを見透かすようなアレステットの言葉は、心の奥底で鍵をかけていた記憶を呼び覚ました。

あの日の情景が呼び起こされる。

呆然と杖を握る自分と、怯えるように引き攣った笑みをこぼす彼女。

それはまだアイリーンが『シャフィク』ではなかった頃の話。

第10話 恐怖

シャフィク家には、住み込みで働くアイリーンと同年のメイド見習いがいた。

ジェーンと言い、その名前の通りどこにでもいるような普通の少女だった。

彼女の母もメイドで、執事の一人と結婚して生まれたのがその娘だった。両親はどちらも身寄りのない孤児院出身だったため、純血主義のシャフィク家の使用人たちのヒエラルキーの中でも最下層だった。当然、ジェーンもまるで屋敷しもべ妖精のような扱いだった。

しかし、アイリーンはジェーンを自分の妹のように気に入っていた。例え『穢れた血』であっても、この少女だけは特別なんだと信じていた。アイリーンの両親も、愛娘の頑なな態度に事実上の白旗を振っていた。

ジェーンもそんなアイリーンを姉と呼んで慕い、ちよこちよこ後ろをついてくるようになった。本当に妹ができたようで、アイリーンは一層彼女を可愛がるようになった。両親が苦虫を噛み潰したような顔をするのも気にならなかった。

しかし。そんな幸せな時間も僅かな間しか続かなかった。

9歳の誕生日を来月に控えた頃、ジェーンに魔法力が発現した。

その数ヶ月前に先んじて魔法力を認められていたアイリーンは歓喜し、妹と共にホグワーツに通う姿を想像して飛び跳ねるように喜んだ。

浮かれていたのだろう。アイリーンは深く考えることもなく、両親の部屋から拝借した杖を使ってジェーンと決闘の真似事を始めた。

かつて家庭教師が実演してくれたものを見よう見まねで真似てみせた、子供のお遊戯。それは本当なら無茶苦茶に杖を振り回して終わるだけのはずだった。

しかし、魔法は実際に発動してしまった。ジェーンの杖から発せられた火花がアイリーンの胸を撃つという、最悪の結果で。

幸いなことにアイリオンは軽傷だった。放っておいても跡の残る火傷でもなく、ヒステリックに泣き叫ぶ母が施した治癒呪文で傷は瞬く間に消え去った。

アイリオンの両親は当然激怒した。もちろん娘に対してではなく、娘に杖を向けるどころか傷をつけたメイドの少女に対してだ。家訓に則って面倒を見てやっているというのに、汚らわしいマグル生まれ風情が愛娘に傷を負わせたのだ。まさに恩を仇で返された気分だっただろう。

それを庇ったのはアイリオンだった。妹を守るのは姉の役目、と涙目でヘタリ込むジェーンを背にして両親の前に立ちはだかった。

両親は驚いたような顔をしたが、アイリオンの決意の顔を見て渋々引き下がった。

その時、彼女は気づかなかった。一切の感情を灯さない淀んだ瞳で冷酷に何かを思案する父の姿に。

その事件の翌日、アイリオンは少女の姿を見なかった。ジェーンの母曰く、昨日のことを気に病んで体調を崩したのだという。アイリオンは少し寂しかったが、治ったら昨日のことは気にしていないと告げて仲直りしようと思った。

さらに次の日、アイリオンは父に呼ばれて書斎に入った。

そこで待っていたのは父と、妹のように可愛がっていたジェーンだった。

思わず抱きつこうとしたが、どうも様子がおかしい。アイリオンの姿を見ると、びくりと全身を震わせて視線を逸らした。

まだ熱が下がっていないのだろうか。ジェーンを心配そうに見つめるアイリオンに、父が仮面のように張り付いた笑みでアイリオンに杖を渡した。父が持っている杖だ。

ジェーンも杖を持っていた。先日使った母のものでもなく、見たことのない柄のものだ。小首を傾げるアイリオンに、父親はそれがジェーンの母親のものであることを教えた。

『いいかい、二人とも。よし、それじゃあ、昨日の続きをやるんだ』

突然のことに、アイリーンは困惑した。なぜ、と問うても父はその超然とした笑みでアイリーンの疑問を全て黙殺した。

戸惑うようにジェーンを見ると、彼女はもう既にこのこと事前に聞かされていたのか、真つ直ぐに杖をこちらに向けている。しかし、その腕は可哀想になるくらい震えていたし、唇は蒼白だ。

何かがおかしい。幼いながらも、アイリーンはその異常な雰囲気を感じていた。

しかし、父がカウントを数え始めると、異議を唱えることはできなかった。

二人の戦いは、一瞬だった。前日のそれとは打って変わって、アイリーンが振った杖からは強力な呪いが指向性を持って放出され、ジェーンの小さな身体を吹き飛ばして壁に叩きつけたのだ。

泣きながら苦しそうに地面に蹲るジェーンに慌てて駆けよろうとしたアイリーンの肩を、父親が止めた。

娘から向けられる驚愕の視線を無視して、父親の視線が真つ直ぐにジェーンを射抜いた。ジェーンはそれに気付いたのか、全身から冷や汗を垂れ流しながら無理矢理に頬を引攀らせ、口元に笑みを浮かべた。

『さ、流石はお嬢様です??。私のようなげ、下賤な血の流れる者では、敵う筈ありません??。どうぞ、昨日のことはお許し下さいませ??。ひ、卑怯な手を使い、御身に傷をつけたことを、深く、深く??。しゃ、謝罪いたします』

全身を子鹿のように震わせ、媚びるように笑って深々と謝るジェーンに、アイリーンは呆然と立ち竦む。

満足そうに父親が深く頷き、ジェーンに部屋から出るように促した。身体を無理に引きずりながら横を通り過ぎようとした妹に、我に帰ったアイリーンが反射的にその腕を掴んだ。

『は、はい。なんででしょうか?』

振り向いた彼女の瞳には、かつてのような親しみの色は微塵も残ってはいなかった。そこにあるのは純然たる恐怖だけ。それを証明するように、握った腕からは微かな震えが伝わってきた。

二の句を継げずに固まるアイリーンにもう一度媚びるような笑みで深々と頭を下げたジェーンが部屋から出て行っても、アイリーンは標本のようにその場から動くことができなかつた。

『これでわかつただろう、アイリーン。さっきのあの娘の憐れな姿を見たかい？ 君の魔法力に、あの穢れた血の少女は手も足も出なかつただろう？ 前に君にあげた本に書いてある通りだつただろう』

反射的に違う、と叫ぼうとした。だが、三日月のように口をぱつくりと開いて邪悪に嗤う父親の姿を見ると、脳みそがぐらんぐらんと揺れて言の葉が音を乗せることはなかつた。

それからしばらくして、ジェーンたちは屋敷から姿を消した。両親は使用人を辞め、シヤフィクから逃げるようにして去つていった。アイリーンは全く知らされていなかった。

それから、父による徹底的な純血主義思想の刷り込みが始まつた。まるで今までのジェーンとの日々が何かの間違いであり、それを塗り潰すように過密であつた。

アイリーンも最初は抵抗しようとした。だが、嘘も100回言えば真実となる。『教育』によつて、次第にアイリーンも父親と同じように差別的で利己的な純血主義者になつていった。

父がかつてジェーンにしたことを聞いても、『穢れた血』相手なのでから当然のこと、間違えていたのは自分の方だつたと恥じる程にその思想は歪められて、無垢だつたキャンバスは真つ黒に染め上げられた。

だが。

その根底にあつたものは――。

感情の籠らない口調で、かつて起きた出来事をポツポツと話した。

今までずっと秘していた記憶を、なぜ仲がいいわけでもないアレステットに話したのか、アイリーン自身よく分からなかった。

別に彼でなくても良かったのかもしれない。ただ、彼の言う『恐怖』の正体を知りたいと思ったから。もう自分でも分からなかったから、誰かに聞いて判断して欲しかったのだろう。

「??それで、さっきの質問の答え、わかったの?」

「ああ、多分」

長い、話だった。長々と喋っているからか言葉足らずで分かりづらいところもあったし、彼女の主観的な印象で語られているために首を傾げるようなところもあった。

それでも、アレステットは彼なりに答えを出していた。彼女が怖れるもの、その正体を。

「シャフィク。ジェーンが辛い目に合ったのは、彼女が傷ついたのは、お前のせいだ」

「――」

そのあまりにも致命的な一言は、正しくアイリーの呼吸を止めた。

「な、にを???」

「純血はマグルよりも優れた存在だ。だからマグルを傷つけてもいい。だからジェーンを傷つけた。自分は悪くない。なぜなら、純血だから、尊いから、優れているから」

「ち、ちが???」

「逆説的に言えば、純血は『優れていなければならない』だからお前は、シルフィを倒してそれを証明しようとしたんだろ」

蔑むでもなく、同情するでもない。しかし強い感情の籠った瞳が大海の瞳を捉えた。

ペキペキと心を覆っていたメツキが剥がれていくような気がした。自分の醜悪極まりない本性が露呈することに言いようのない嫌悪を感じる。

しかし、一方で心の奥底で誰かに見破られることを望んでいた自分にも気がついた。

「それが崩されれば、お前は認めざるをえない。ジェーンを傷つけた自分の罪を。シャフィク家の一人娘の無知な行動で、義妹をそんな目に合わせてしまった事実を。」

——お前が真に恐怖していたのは、純血主義の毀損じゃない。自分の過去に向き合うことだ」

それがとどめだった。

在りし日の義妹の色んな笑顔が脳裏に蘇る。あの、花のように笑う少女の未来を奪ったのか。他ならぬこの手で。

「ち、違うわ！ お、お父様のせいよ！ お父様がジェーンを脅して、杖に細工をして?!」 それに、わたしはまだ幼かったわ！」

「そうだな。最大の元凶はお前の父親だろう。俺も、お前にすべての非があるとは思えない。」

だが、俺がお前の罪を赦したらお前は納得するのか？ 重要なのは、お前がどう思っているのかなんじやないか」

「わたしが、どう思ってるか????」

そんなもの。

最初から、答えなんてわかりきっていた。

「ごめん、なさい?」

ポロポロと涙が頬を伝った。

本当に自分は悪くないと考えていたなら、こんな行動はとっていないかった。いや、そもそもジェーンのことだって忘れてしまっていただろう。そうすれば完璧な純血主義者になれただろう。

だが、アイリーンは忘れてたくても忘れられなかった。否。忘れてはいけないのだと本心では気付いていた。

「ごめ、ん。ごめん、なさい、ごめんなさい???」

顔を皺くちやに歪め、滂沱のように流れる涙で掛け布団を濡らしながら誰かに謝るアイリーンの姿に、アレステットは拳を強く握った。

ある意味で、彼女もアレステットと似ていた。純血主義という旧態然とした思想の哀れな被害者。

アレステットはしゃくりを上げながらわんわんと泣くアイリーンに背を向ける。それでも、彼女の嗚咽が止まるまでその場から動かなかった。

「わたし、どうすればいいのかしら?」

普段の勝ち気な眦が見る影もなく腫れ、すっかりとツインテールを萎ませたアイリーンがボソリと呟いた。

「どうしようもないだろ。そもそもジェーンたちの足取りも掴めてないんだろ?」

きつと彼はオブラートという言葉を知らずに育ったのだろう。

だが、少なくとも今は変に同情されて甘い言葉をかけられるよりはマシだった。

「でも、それじゃ??今までと何も変わらないわ」

自覚してしまった以上、もう今までのようには行かない。本当は今すぐにでも謝りに行きたいところだが、ジェーンたちがフランスに渡ったということくらいしかアイリーンは知らされていないため、実行に移すのは難しい。

だが、途方も無い罪の意識に苛まれている状態で何もしないという

選択肢を選ぶことなんてできそうになかった。

「??『本当に謝りたいと思った時、その相手がいることはまずない。しかし、いずれ適切な時がくることもある』。これは、昔俺の師が言っていたことだ。」

もしお前がジェーンに謝罪する時が来るならば、それまでその思いを抱き続けろ。それが今のお前にできる償いってやつなんじゃないか」

それは、ある意味で最も辛い罰だ。

彼の言葉は、会えない可能性の方がずっと大きいということの意味している。自分を許すこともできず、胸が張り裂けそうな罪悪感を抱えながらこの先の人生を歩んでいけと言うのか。それならいつそ、ジェーンに真正面から罵声の限りを尽くされた方がマシだとすら思えた。

けれど、今のアイリーンは救いなど求めてなどいかなかった。巡礼者のような面持ちで深く頷く。

「??けど、何も一人で抱え込む必要はない」

「??え?」

「たしかに、その思いはお前が背負うべきものだ。だが、お前を支えることや慮ることはできる。そう言ったやつのことをなんていうか知ってるか?」

「??それは?」

「友人ってのは、そういう存在のことを言うんだろ。??ありきたりな言葉かもしれないけど」

彼の脳裏によぎっていたのは、唯一無二の友人の笑顔。彼女はアレステットの過去を知らないけれど、その存在はアレステットにとってひどく尊く大切なものだった。

思っても見なかった優しい言葉に、思わず目をパチクリとさせた。アレステットも柄ではないと自覚しているのか眉間に皺を寄せながら顔を逸らした。

まるで照れを隠すようなその姿を見てみると、胸の奥からじんわりと暖かい感情が湧き出してきた。その気持ちをどう形容すればいい

のかわからなかったが、冷え切った心を溶かすような気がした。

心にのしかかる鉛のような重みは変わらないけれど、たしかに隣に誰かがいてくれれば、それだけでうまくやっていけるように思えた。

「ふん、ならアンタがわたしを支えてくれるってことね？」

「??はい？」

「??ろしくね、アレステット」

「??待て。友達ってのは強引になろうととしてできるものじゃない。親交を深めた結果に付随して構築される関係であって——」

「なによ、今さら知らん顔するつもり？ 乙女の秘密を全部暴きたてたのよ？責任とりなさいよ！それとも、他の人にもペラペラこの話をしろって言うの!?!？」

「いや、お前が勝手に話し始めたんだろ??。というか、また責任か??」
露骨に顔を顰めるアレステットに、ちよっぴり傷ついた。涙腺が馬鹿になってしまっているのか、枯れたはずの涙が染み出すように大きな目の縁に溜まった。

涙目でジトツとアレステットを睨むと、バツが悪そう視線を逸らした。アイリーン自身は気づいていないが、その姿はさながら捨てられた子猫のようだった。

「何を騒いでいるの!?!？」

ただ領けばいいだけなのに、口ごもる彼に再び本格的に涙が出てきたそうになってきた時、校医であるマダム・ポンフリーが鬼の形相で2人の下にやってきた。

ベッドの上で上体を起こし、目を真っ赤に泣きはらすアイリーンと、焦ったような顔をするアレステット。

その姿をポンフリーがどう解釈したのかはさておき、患者のためならあらゆる犠牲を払う白衣の天使(○)にアレステットは追い立てるように退出させられた。

「??なら、絶対にアンタを友達にしてみせるわ！」

驚いたようにアレステットが振り向く。

答えは聞かず、布団に潜り込んで背を向けた。

彼がなんと言おうと、絶対に友達だと認めさせてやる。アイリーン

の瞳は決意の炎でメラメラと燃えていた。その感情の源泉が何かは分からなかったが、深く考えず、己の心に従うことにした。

アレステットの受難がまた一つ増えた瞬間だった。

寮対抗のクイティッチ杯。カードはスリザリンvsグリフィンドール。その日は、シルフィ・コールフートにとって待ちに待った土曜日だった。

別にクイティッチが楽しみだったわけではない。いや、元いた普通の世界にない競技は新鮮で面白いとは思うのだが、如何せんシルフィはどちらの寮にも思い入れはない。

スリザリンはシルフィがマグル生まれというだけで差別するし、グリフィンドールはスリザリンというだけで目の敵にする。どっちの寮がどうなるかが彼女にとっては毛ほどの興味もなかった。むしろ、可能ならばどっちも何らかの酷い目に遭えばいいのに、とすら思っていた。

それでもその日が彼女にとって楽しみだったのは、試合観戦そのものにある。

言わずもがな、唯一にして無二の友であるアレステットと一緒に試合を観ることである。一人で見るとつまらない映画でも、友人と一緒に楽しむのと同じことだ。

だが、彼との待ち合わせ場所にやってきたシルフィのテンションは正に箒星のように急降下した。

「???なぜ、貴女がここにいますか?」

アレステットの隣をドヤ顔で占拠するアイリーン・シャフィクを鋭く睨め付ける。

ここ最近、なぜか彼女は今までと打って変わってアレステットに絡むようになっていた。

その豹変振りにシルフィも最初は咄然としたものだ。だが、放っておいたらアレステットの親友の座を追われるのではないか、自分の友達がとられてしまうのでないかと危惧した。

結果的として、シルフィとアイリーンの間の溝は深まるばかりであった。

「何よ、わたしがここにいちやまずいわけ？」

反抗するようにアイリーンも睨み返す。2人の間にピリツとした緊張感が走った。あの決闘から数日、何度目か分からない光景だった。アレステットが第2ラウンドを止めたのも一度や二度ではない。「ええ、マズイですね。アレステットは友達の私と一緒に試合を観戦するので、貴女は他のグリフィンドールの友人と観戦するといいでしよう。もしいるなら、の話ですけど」

今度はアイリーンが目を細めた。

「バカじゃないの？ この試合は寮対抗の試合よ？ スリザリン生はスリザリンを、グリフィンドール生はグリフィンドールを応援するの。アンタこそスリザリンの友達と観戦すれば？ もっとも、もしいるなら、だけど」

2人は同時に杖を抜いた。アレステットが無言呪文で2人の杖を取り上げる。これももう何度目かわからなかった。

「はあ、仕方ない。3人で観るか」

本音を言えばアレステットとしてはシルフィと2人で見たい。

それは彼女が親友であると言うのもそうだが、アイリーンのように喧しいのが隣にいると目立ってしょうがないというのが大きな理由だ。

だが、まさか馬鹿正直にそのまま告げるほどアレステットはデリカシーが無いつもりはない。もう彼女の涙目は見飽きている。

渋々、といった様子のアレステットに、アイリーンが目尻を吊り上げる。シルフィも邪魔者が引っ付いてくることに不満げな様子である。

「なによ、嫌なの？」

「そうですよ、アレステット。はっきり言わないと、この女はいつまで

もアレステットのことを友達だと勘違いし続けますよ」

高速で顔の向きを戻してまた睨み合う2人に、アレステットは大きなため息を吐く。

逃げるように視線を逸らすと、その先には今回もお世話になる予定のハツフルパフの一団がいた。

その中には勿論ハンナの姿がある。しかし、なぜか彼女を筆頭に女子学生たちがうっとりした表情でこちらを見ていた。楽しみに笑って合って何事かを囁き合っている。悪意のある感じは見受けられないのに、なぜかアレステットの中で猛烈に嫌な予感が膨れ上がっていた。

そこからまた逃げるように視線を横にずらすと、ハーマイオニーが手を振りながらこちらに駆け寄って来ていた。その隣には白い大きな筒をシェーマスと2人がかりで抱えて恨めしそうにこちらを見るロンもいる。

ホグワーツに入学してからと言うものの、目を追うことに賑やかになつていく周囲に、アレステットは苦い顔を浮かべた。